

## ＜調査・研究＞

### 平成27（2015）年度 跡見学園女子大学生の 「国語・コミュニケーションに関するアンケート調査」の結果分析と考察

● 田 中 浩 史

#### 1. はじめに

筆者は、跡見学園女子大学（以下「跡見女子大」と記す）在籍の学生を対象に、毎年学生たちの日常的な「国語・コミュニケーションに関する調査研究」を行い、その結果の分析・考察を重ねている。平成27（2015）年度は、学生たちが生活言語としての日本語を習得する段階で、社会や家庭とどのような関わり合いをもってきたのか、また、いわゆる「若者言葉」や「外来語」、「複合語・省略語」「慣用句」などを実生活の中でどの程度頻繁に使いながら生活してきたのか、などの実態を明らかにする目的で、以下に述べる調査項目を設定しアンケート調査を実施した。調査方法は前回の調査<sup>1</sup>とほぼ同様で、筆者の所属する大学での授業科目において筆者作成のアンケートを配布、回収して集計し、分析・考察を加えた。考察の際には、文化庁が平成7年度から全国規模で毎年実施している「国語に関する世論調査」を参照した。この文化庁の調査は、もともと「日本人全体の国語に関する意識や理解の現状について調査して国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する」というねらいがあるとされるものである。筆者のアンケート調査もこの方針にそった形で調査項目を設定している。本稿では、全国調査の結果と跡見女子大学生の調査結果を比較し、その異同や跡見女子大学生の「国語・コミュニケーション意識」特徴を明らかにしたい。

#### 2. 平成27年度 跡見女子大学「国語・コミュニケーションに関するアンケート調査」の概要

調査目的	跡見女子大学生の国語・コミュニケーションに関する意識や理解の現状について調査し、大学教育の立案・構成に資するとともに、学生の国語・コミュニケーションに関する興味および関心を喚起する。		
調査対象	跡見女子大学の在籍学生（文学部コミュニケーション文化学科学生を中心に）		
調査期間	平成27年11月30日～12月8日		
調査方法	筆者担当5科目の履修生を対象にアンケートを配布・回収		
調査結果	調査対象総数	136 人	
	有効回答数（率）	103 人（75.7%）	
	無効回答数（率）	0 人（0.0%）	
属 性	性別	女（跡見女子大学生：1年～4年）	
	年齢	18歳～23歳	
	（内訳）	18歳8人、19歳28人、20歳13人、21歳40人、22歳12人、23歳1人、 無回答1人（合計103人）	

1 『平成26年度跡見学園女子大学生の「国語・コミュニケーションに関するアンケート」の調査結果と分析・考察』（跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科発行『コミュニケーション文化第9号』（平成27年3月）田中浩史著

生育地 埼玉36人、東京26人、千葉11人、茨城3人、栃木3人、群馬2人、静岡1人、長野2人、新潟3人、福島1人、宮城2人、北海道1人、福岡1人、無回答11人 (合計103人)

(参考) 文化庁の「国語に関する世論調査」の概要

調査目的	文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。		
調査名	平成26年度「国語に関する世論調査」		
調査対象	全国16歳以上の男女		
調査時期	平成27年1月～2月		
調査方法	一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施		
調査結果	調査対象総数	3,493	人
	有効回答数(率)	1,942	人(55.6%)

### 3. 今回のアンケートの調査項目設定について

文化庁が平成26年度に実施した「国語に関する世論調査」は、▽今の国語は乱れていると思うか ▽家庭で言葉遣いについて注意されたか ▽言葉遣いを誰から注意されたか ▽家庭で受けた言葉のしつけについて現在はどう思うか ▽中学生・高校生の話を聞いて言葉遣いが乱れていると感じるか ▽小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は誰だと思うか ▽子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うか、などに関する調査項目を設定している。また、「言い方の使用頻度」や「新しい複合語、省略語について」「慣用句等の意味・言い方について」も、具体的な表現や言葉遣いを例示しながら、国語・コミュニケーションに関する近年の国民意識や実態を明らかにしようと試みている。これを参考に、平成27(2015)年度の筆者の跡見女子大学生対象のアンケートでは、①社会と家庭に関する言葉遣いとの関係について ②若者に多いとされる表現の使用頻度について ③漢字を用いた語と外来語の使用頻度について ④新しい複合語、省略語について ⑤慣用句の意味・言い方について ⑥慣用表現についての6項目について質問項目を設定してアンケートを実施した。以下にその集計結果と分析・考察を記す。

### 4. 跡見女子大学生のアンケート結果と分析・考察

#### 1) 言葉遣いにおける女子学生と社会・家庭との関係

社会と家庭が女子大学生の言葉遣いにどのような関係をもっているのかを調査するため、日常生活の言葉遣いから考えて、跡見女子大学生が「今の国語は乱れている」と思うか、それとも「乱れていないと思うか」を尋ねた。

【質問1】あなたは、今の国語は乱れていると思いますか？

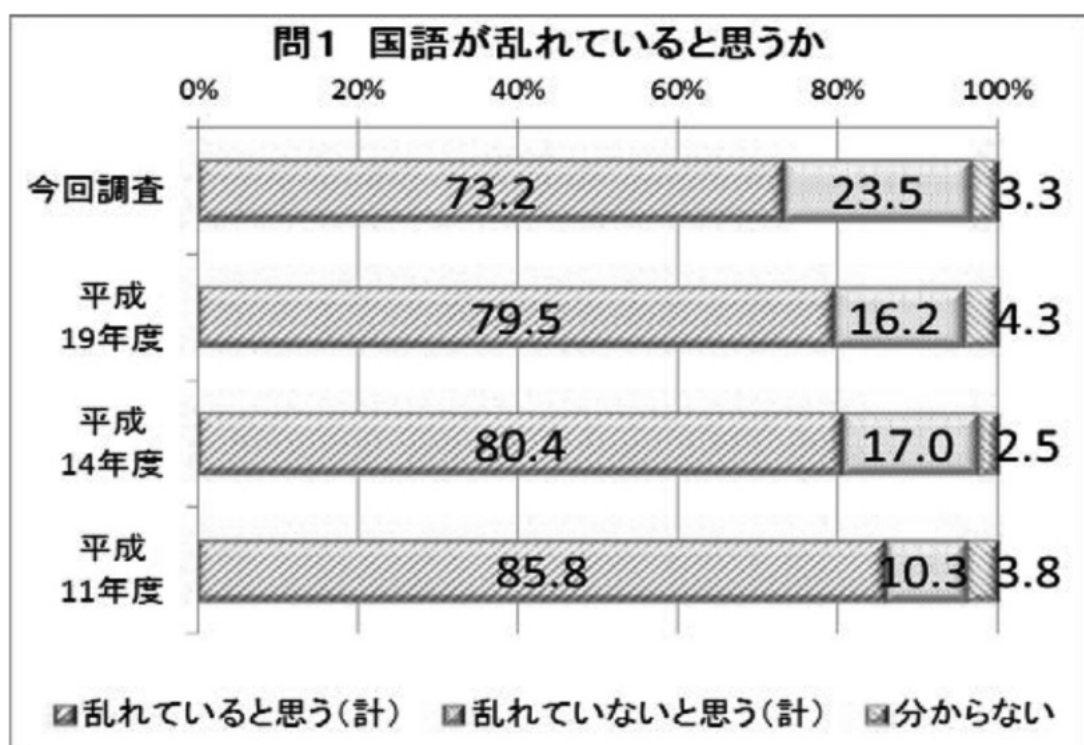
	投票数(人)	割合(%)
①乱れていると思う	64	(62.1%)
②乱れていないと思う	17	(16.5%)
③分からない	22	(21.4%)

＝跡見女子大学生の6割が、今の国語は乱れていると感じている＝

跡見女子大学生は、「乱れていると思う」の割合が62.1%で、逆に「乱れていないと思う」の割

合は16.5%であった。

次表の〔問1〕は文化庁が行った「平成26年度国語に関する世論調査」（以下「国語調査」と記す）の結果であるが、全国調査では「乱れていると思う」人は73.2%であり、跡見女子大学生は全国調査より10ポイント以上もその割合が低い。同時に「乱れていない」と答えた学生の割合（16.5%）も全国調査（23.5%）を下回り、「分からない」と回答を留保した学生（21.4%）が全国平均（3.3%）より18ポイント以上も多い。これは“国語の乱れ”の判断基準が自分の中で明確になっていない、あるいはその定義づけがなされていないことなどによる“迷い”とも考えられる。注目すべき点は、文化庁の過去の国語調査結果（平成11、14、19年度）を経年変化で分析してみると、「乱れていると思う（計）」は全国的に減少傾向にあり、「乱れていないと思う（計）」は増加傾向にあることである。



〔問1〕国語が乱れていると思うか（文化庁：平成26年度「国語に関する世論調査」より）

【質問2】あなたは、家庭で言葉遣いについて注意されましたか？

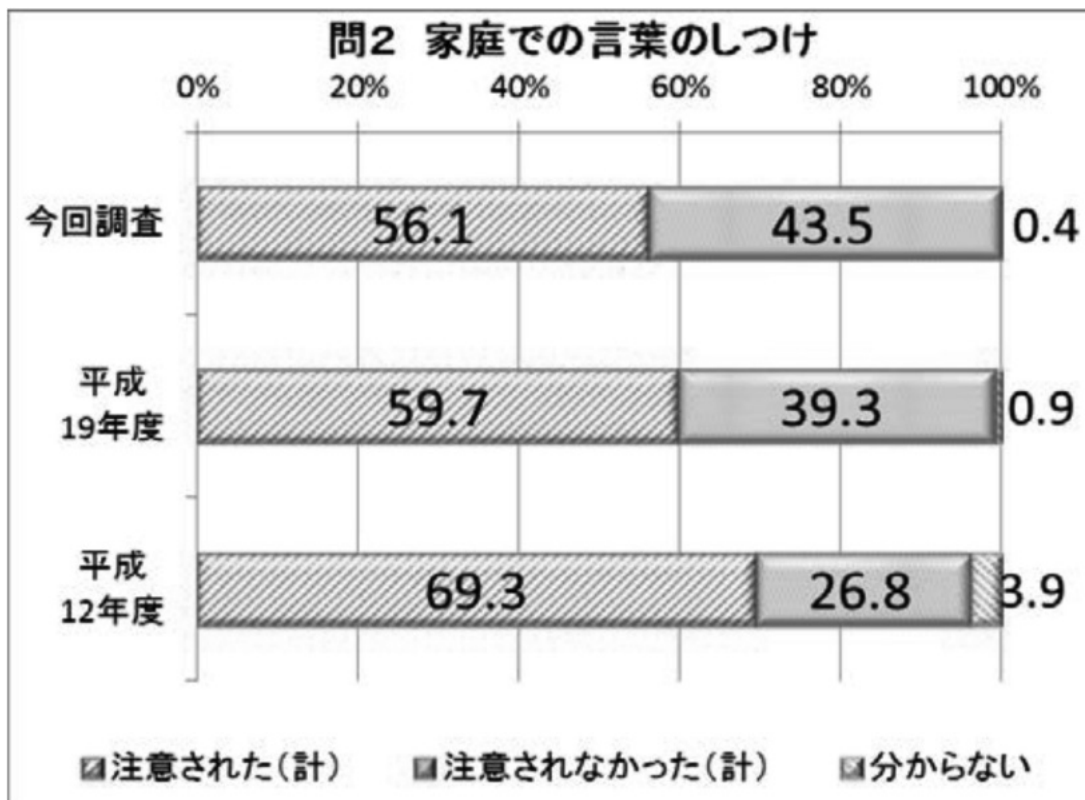
- |           |    |         |
|-----------|----|---------|
| ①注意された    | 84 | (81.6%) |
| ②注意されなかった | 16 | (15.5%) |
| ③分からない    | 3  | (2.9%)  |

＝跡見女子大学生の8割以上が、家庭で言葉遣いについて注意された経験がある＝

跡見女子大学生のうち「注意された」学生の割合（81.6%）は、「注意されなかった」学生の割合（15.5%）よりも、61.1ポイントも高い。

次頁の〔問2〕は文化庁の全国国語調査の結果だが、それと比較してみると、跡見女子大学生が「注意された」割合は、全国調査の56.1%を25.5ポイントも上回っている。このことから、跡

見女子大学生の家庭では、言葉遣いについての“しつけ”が全国的にも厳しく行われているということが窺える。また文化庁調査における過去の調査結果（平成12、19年度）と今回の調査結果を比較すると、「注意された」は、69.3%⇒59.7%⇒56.2%と毎回減少傾向にあり、逆に「注意されなかった」人の割合は増加傾向にある。これをもとに今後の傾向を推測すれば、「言葉遣いの“しつけ”」の問題は、家庭での強い関心事からは次第にはずれ、「言葉遣いの“しつけ”」そのものが、日本全国の家庭で行われなくなっていくのではないかという危惧を覚える。



〔問2〕家庭で言葉遣いを注意されたか（文化庁：平成26年度「国語に関する世論調査」より）

【質問3】あなたは、言葉遣いを誰から注意されましたか？（複数回答も可）

①母親	76	(73.8%)
②父親	38	(36.9%)
③祖母	7	(6.8%)
④祖父	9	(8.7%)
⑤その他の人から（おじ／友人／アルバイト先の上司／兄弟姉妹／先生）	10	(9.7%)
⑥一度も注意されたことはない	9	(8.7%)

＝跡見女子大学生が言葉遣いを注意されたのは「母親」が多く、「父親」「その他の人」の順＝  
家庭で言葉遣いを「注意された」と答えた人に、主に誰に注意されたかを尋ねた。「母親」が73.8%で最も多く、次いで「父親」(36.9%)、「その他の人（おじ／友人／アルバイト先の上司／兄弟姉妹／先生）」となっている。文化庁の過去の国語調査では、性別で分析すると、女性の場合は

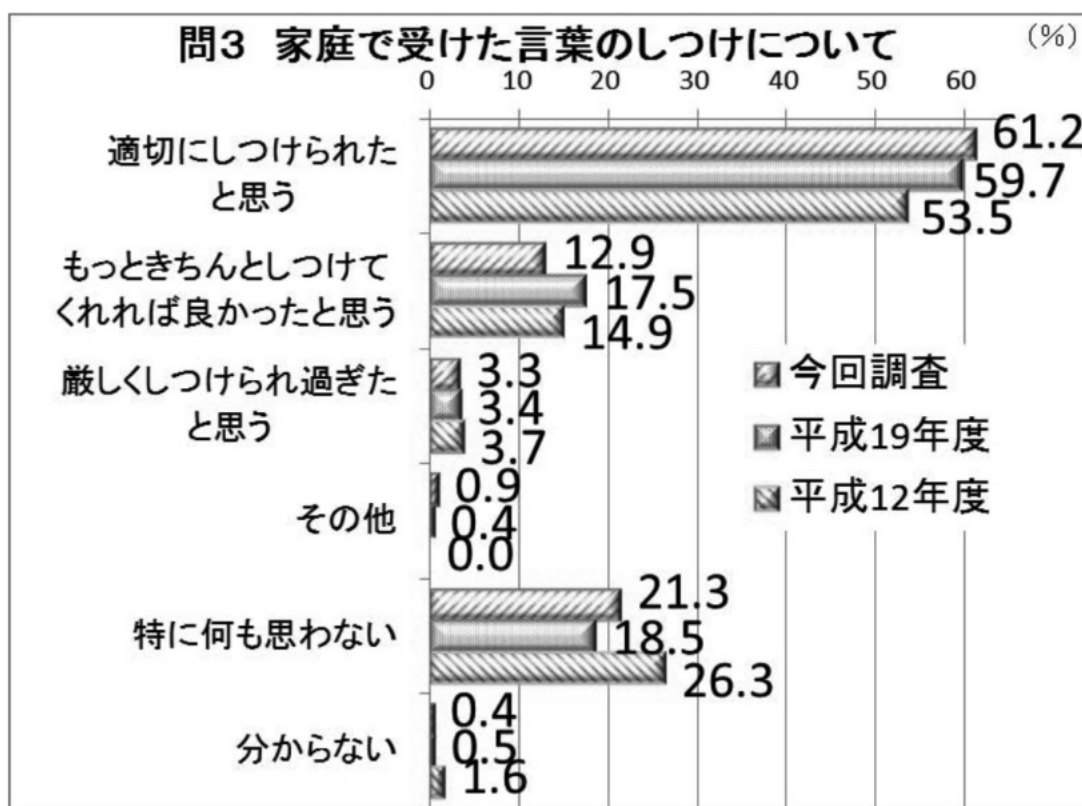
「母親」から注意されたという人が多く、男性の場合は「父親」から注意されたという人が多い傾向がみられるため、女子大学である本学の学生が、「母親」から注意されるケースが多いという結果には頷けるところがある。

【質問4】あなたは、家庭で受けた言葉のしつけについて、現在はどう思いますか？

①適切にしつけられたと思う	74	(71.8%)
②もっときちんとしつけてくれればよかったと思う	10	(9.7%)
③厳しくしつけられ過ぎたと思う	0	(0.0%)
④特に何も思わない	19	(18.4%)

＝跡見女子大学生は、家庭で受けた言葉遣いのしつけについて、「適切にしつけられた」と思っている学生が7割、「もっときちんとしつけてくれればよかった」と思う人は1割弱である＝自分が家庭で受けた言葉のしつけについて現在はどう思っているかを尋ねた。自分の気持ちに近いものを1つ回答してもらったが、「適切にしつけられたと思う」が71.8%、「もっときちんとしつけてくれれば良かったと思う」が9.7%だった。

次の〔問3〕は、文化庁の「国語調査」における同じ質問項目に対する結果であるが、全国調査の「適切にしつけられたと思う」という結果が62.2%であるのに比べると、跡見女子大学生の場合はそれより9.6ポイントも高く、ここでも「言葉の“しつけ”」については、概ね「適切だった」と考えている人が多いことが読み取れる。逆に、【質問3】で「(言葉遣いについて)一度も注意されたことはない」と答えた人が8.7%おり、この【質問4】でも「もっときちんとしつけ



〔問3〕家庭で言葉遣いを注意されたか（文化庁「平成26年度国語に関する世論調査」より）



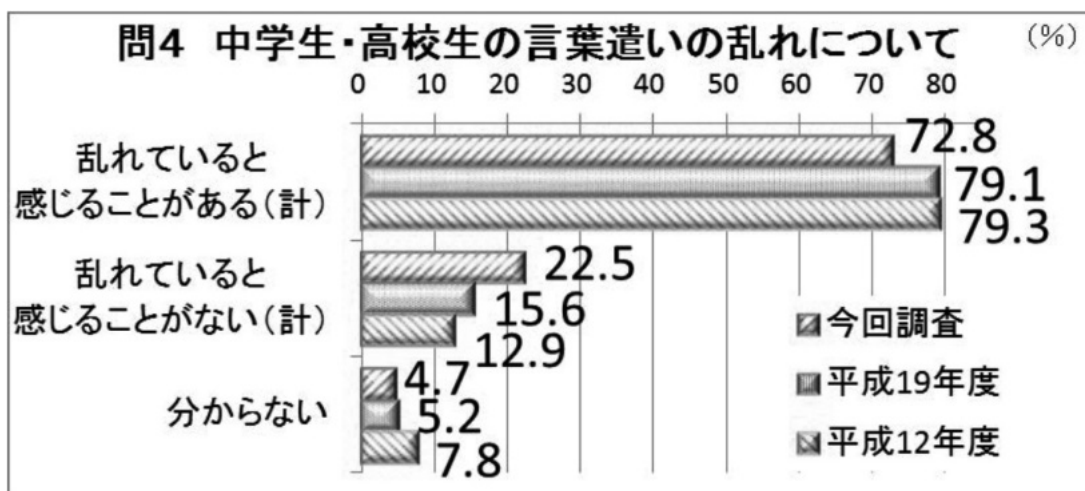
てくれればよかった」と答えた人が9.7%いるため、家庭での「言葉の“しつけ”」について不満を抱いていると思われる学生も一定数（1割弱）存在していることが窺える。また今回の全国調査結果を過去の調査結果（平成12、19年度）と比較すると、「適切にしつけられたと思う」は増加傾向にあることが読み取れ、一方で「もっときちんとしつけてくれれば良かったと思う」は平成12年度から19年度に3ポイント増加したが、今回調査では5ポイント減少している。この分析については、もうしばらく調査を続けないと明確な判断は難しい。「言葉の“しつけ”」について、家庭内で、誰がどの程度子どもに関わったらよいのか、常に難しい判断を求められる状況が続いている。

【質問5】あなたは、自分より年下（小学生、中学生、高校生ら）の話を聞いて、言葉遣いが乱れていると感じますか？

①乱れていると感じることがある	85	(82.5%)
②感じることはない	10	(9.7%)
③分からない	8	(7.8%)

＝跡見女子大学生の8割以上は周囲の小／中／高校生の言葉遣いが乱れていると感じている＝  
現在大学生になった人が、周りにいる自分より年下の小学生、中学生、高校生らの話を聞いて、言葉遣いが「乱れている」と感じる可能性があるか、それとも感じることはないかを尋ねた。跡見女子大学生は、8割以上の82.5%が「乱れている」と感じていることが判明した。一方、「乱れていると感じることはない」という人は9.7%と、10%を下回った。

次の〔問4〕は、今回の文化庁の全国国語調査の結果を示したものだが、跡見女子大学生の調査結果と比較してみると、言葉遣いが「乱れていると感じることがある」という人は全国調査では72.8%となっていて、跡見女子大学生は全国調査よりも「乱れている」と感じている人の割合が10ポイント近く高くなっている。一方、言葉遣いが「乱れていると感じることがない」とする人は全国調査では22.5%となっていて、跡見女子大学生の「乱れていない」という人の割合の2倍以上にのぼっている。この両者のデータからすると、跡見女子大学生は全国調査よりも「言葉遣いの乱れ」を敏感に感じていることが窺える。



〔問4〕中・高校生の言葉遣いの乱れについて（文化庁：平成26年度「国語世論調査」より）

また今回の全国調査の結果を過去の結果（平成12、19年度）と比較すると、小学生・中学生・高校生の言葉遣いについて、「乱れていると感じることがある」人の割合は、79.3%⇒79.1%⇒72.8%と減少傾向にあるのに対して、「乱れていると感じることがない」割合は、逆に12.9%⇒15.6%⇒22.5%と増加傾向にある。このデータからとすると、若年層の「言葉遣いの乱れ」に対する感覚は、次第に“許容的”ないしは“寛容的”になりつつあると指摘できるのではないだろうか。

ここで、今回の調査における【質問5】と【質問1】との関連について触れておきたい。【質問1】で「日常生活の中で接している言葉から考えて、今の国語は乱れていると思うか、それとも乱れていないと思うか」を尋ねたのに対して、跡見女子大学生は「乱れていると思う」人の割合が62.1%で、逆に「乱れていないと思う」の割合は16.5%であった。全国調査でも同様の傾向を示しており、「乱れていないと思う」人の割合は増加傾向にあった。ところが、この【質問5】で、自分より年下の小・中・高生に対しては、「乱れている」と感じている人の割合が72.8%と、自分たちの世代の言葉遣いに対する感じ方よりも厳しい見方になっている。この結果は、今の自分たちの言葉遣いよりも若い世代の言葉遣いに対する「見方」が厳しいのか、あるいは実際に若い世代ほど言葉遣いの乱れが「進行」していることを示しているのか、さらにデータがないと解釈が難しい。いつの時代でも、「上の世代が下の世代を見るときには厳しい見方をするものだ」とはよく言われるが、今後も詳細な調査と分析が必要であると考えます。また、こうした設問は、何を“国語の乱れ”とするかという定義づけや判断基準を明確にしない限り、どうしても感覚的になりがちなので、信頼のおける結果が得にくい要素を含んでいると考えざるを得ない。

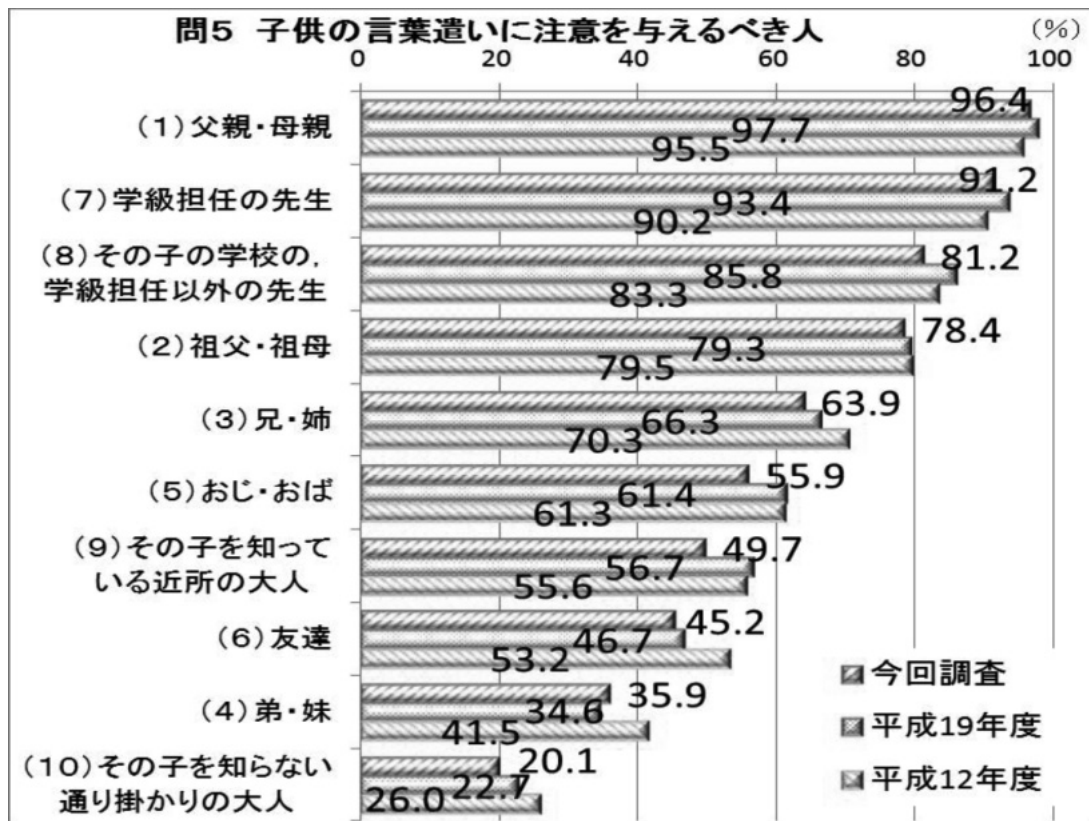
【質問6】小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は誰だと思いますか？

①父親	82	(79.6%)
②母親	89	(86.4%)
③学級担任の先生	62	(60.2%)
④祖父・祖母	27	(26.2%)
⑤兄・姉	28	(27.2%)
⑥おじ・おば	10	( 9.7%)
⑦近所の知人	5	( 4.9%)
⑧友達	5	( 4.9%)
⑨弟・妹	1	( 1.0%)
⑩周囲の大人	31	(30.1%)

＝跡見女子大学生は、小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は、1) 母親 2) 父親 3) 学級担任の先生 であると考えている＝

近くにいた小学生が友達に対して乱暴で聞き苦しい言葉遣いをしているとき、誰が注意を与えるべきだと思うかを尋ねた。跡見女子大学生は、小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は、1) 母親 (86.4%) 2) 父親 (79.6%) 3) 学級担任の先生 (60.2%) たちであると考えていることが分かった。

次頁の〔問4〕は「子供の言葉遣いに注意を与えるべき人」についての文化庁の全国調査の結果であるが、跡見学園女子大学生のアンケート結果はこの全国調査の結果とほぼ同じで、小学生の言葉遣いに責任を持って注意するのは母親、父親と担任の教師である、と多くの人は考えている。ただ注目をしたいのは、それに続く人として、兄・姉、祖父・祖母、周囲の大人、を上げる



〔問5〕子供の言葉遣いに注意を与えるべき人（文化庁：平成26年度「国語世論調査」より）

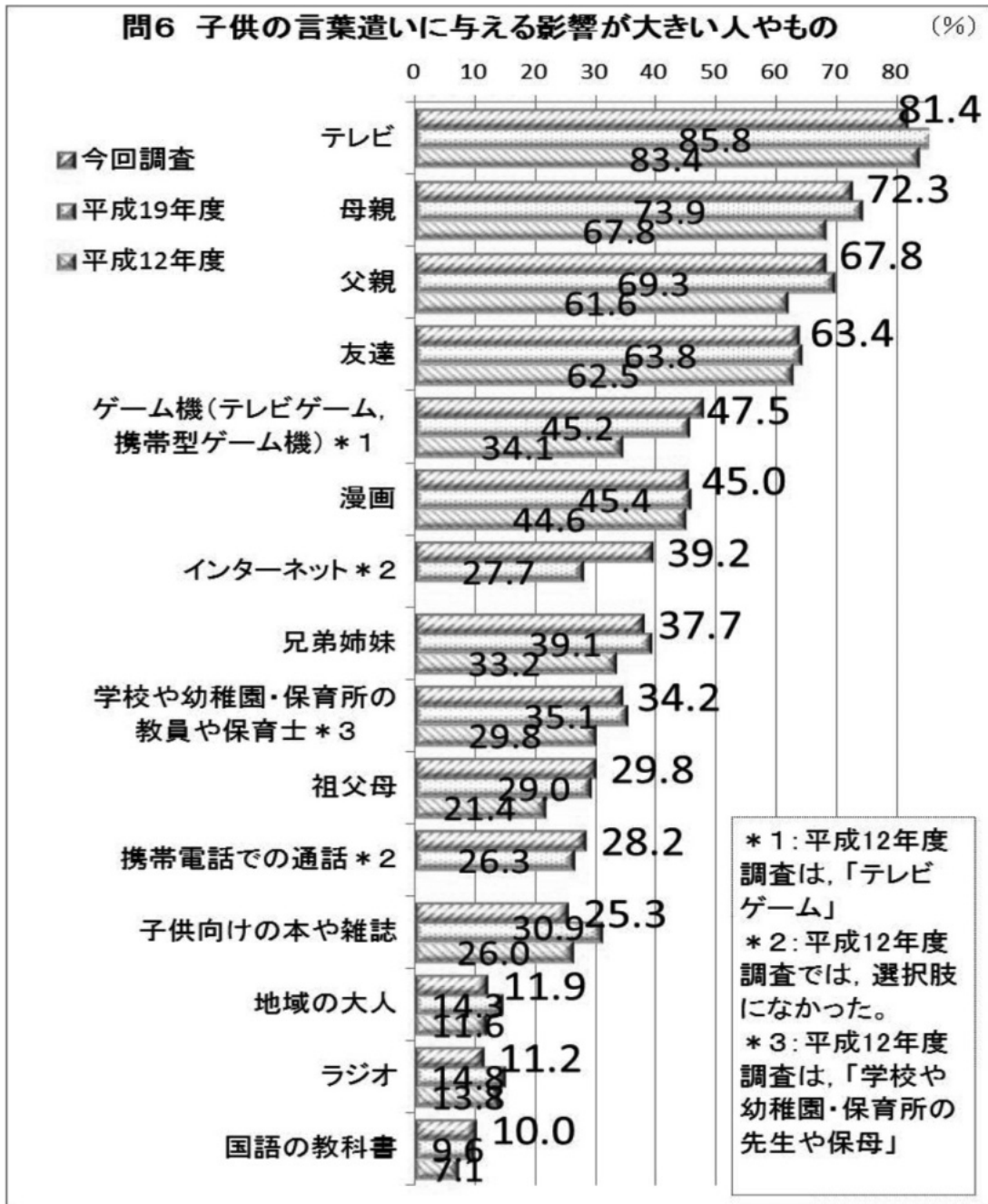
人が30%前後もいることで、跡見女子大学生は特に「周囲の大人」の影響力を重視していることが窺える。例えその子知らない通りがかりの大人であっても、子供の言葉遣いには注意を与えるべきだと考えているようにも読み取れる。ただ、実際にそれを実行できるかどうかは別問題であるが…。核家族化や女性の社会進出が広がって、子どもとの接触時間が減少する中では、子どもたちの言葉遣いに対して注意を与えたり影響力を持ったりする人は、親や教師だけでなく兄弟姉妹や祖父母、周囲の大人へと拡散する傾向が見え、否応なくそうならざるを得ない現状を反映しているともいえる。もはや、子どもたちの言葉遣いに対する責任は家庭や学校に求めるばかりでなく、何らかの社会システムとしての「言葉の“しつけ”教育」を構築すべき時期に来ているのではないだろうか。つまり、その家族と関係を持ちかつ支える周囲の大人世代や地域の大人たちにも、その指導力が求められてきているのではないかと筆者は考える。

【質問7】あなたが、言葉遣いで最も強い影響を受けた人やものは何ですか？ 次の中から選んで下さい。（複数回答も可）

- |            |       |         |
|------------|-------|---------|
| ①テレビ・ラジオ45 | 43.7% |         |
| ②母親        | 46    | (44.7%) |
| ③父親        | 27    | (26.2%) |
| ④友達        | 44    | (42.7%) |
| ⑤ゲーム（機）    | 4     | (3.9%)  |



⑥漫画	12	(11.7%)
⑦インターネット	16	(15.5%)
⑧兄弟姉妹	10	(9.7%)
⑨幼稚園の先生・保育士	1	(1.0%)
⑩祖父母	8	(7.8%)



〔問6〕子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やもの（文化庁：平成26年度「国語世論調査」より）

⑪国語の教科書	10	( 9.7%)
⑫周囲の大人	21	(20.4%)
⑬その他 (アルバイト先の先輩・上司、本・小説・雑誌)	7	( 6.8%)

＝跡見女子大学生は、言葉遣いで最も強い影響を受けた人やものについて、1) 母親 2) テレビ・ラジオ 3) 友達 4) 父親 をあげている＝

子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思ふかを尋ねた（選択肢の中から幾つでも回答可）。跡見女子大学生は、言葉遣いで最も強い影響を受けた人やものについて、1) 母親 (44.7%) 2) テレビ・ラジオ (43.7%) 3) 友達 (42.7%) 4) 父親 (26.2%) をあげた。

前掲の〔問6〕は文化庁の「国語調査」の結果であるが、これによれば「テレビ」が81.4%で最も高く、次いで「母親」(72.3%)となっている。跡見女子大学生と全国調査とでは1位と2位が逆で、跡見女子大学生にとってはテレビ・ラジオよりも母親の影響が大きいことが分かる。3位と4位も跡見と全国調査では結果が逆で、跡見女子大学生は父親 (26.2%) よりも友達 (42.7%) の影響の方が大きく、言葉遣いの影響面でいうと、父親の存在がやや希薄であるのが特徴となっている。

跡見女子大学生の5位以下は、「周囲の大人」「インターネット」「漫画」「兄弟姉妹」「国語の教科書」「祖父母」「その他 (アルバイト先の先輩・上司、本・小説・雑誌)」となっている。一方の全国調査では、3位以下は、「父親」「友達」「ゲーム機 (テレビゲーム、携帯型ゲーム機)」「漫画」「インターネット」「兄弟姉妹」「学校や幼稚園・保育所の教員や保育士」「祖父母」「携帯電話での通話」「子供向けの本や雑誌」である。文化庁の全国調査で今回の調査結果を過去の調査結果 (平成12、19年度) と比較すると、平成19年度から今回調査にかけて「インターネット」が12ポイント増加し、「子供向けの本や雑誌」「テレビ」が減少している。時代を反映してか、子供の言葉遣いに与える影響が大きいものも、「インターネット」や「漫画」などの占める割合が周囲の人やものに比べて増加してきていることが注目される。

## 2) 若者に多いとされる表現の使用頻度について

日常生活の会話の中でよく耳にする言い方から6つの例を挙げて、それぞれの言い方を学生たちがすることがあるか、それともないかを尋ねた。以下で、跡見女子大学生のアンケート結果を全国調査の結果と比較しながら分析する。

### (1) 「わたし的には」

「わたしはそう思います」を「わたし的にはそう思います」と言う

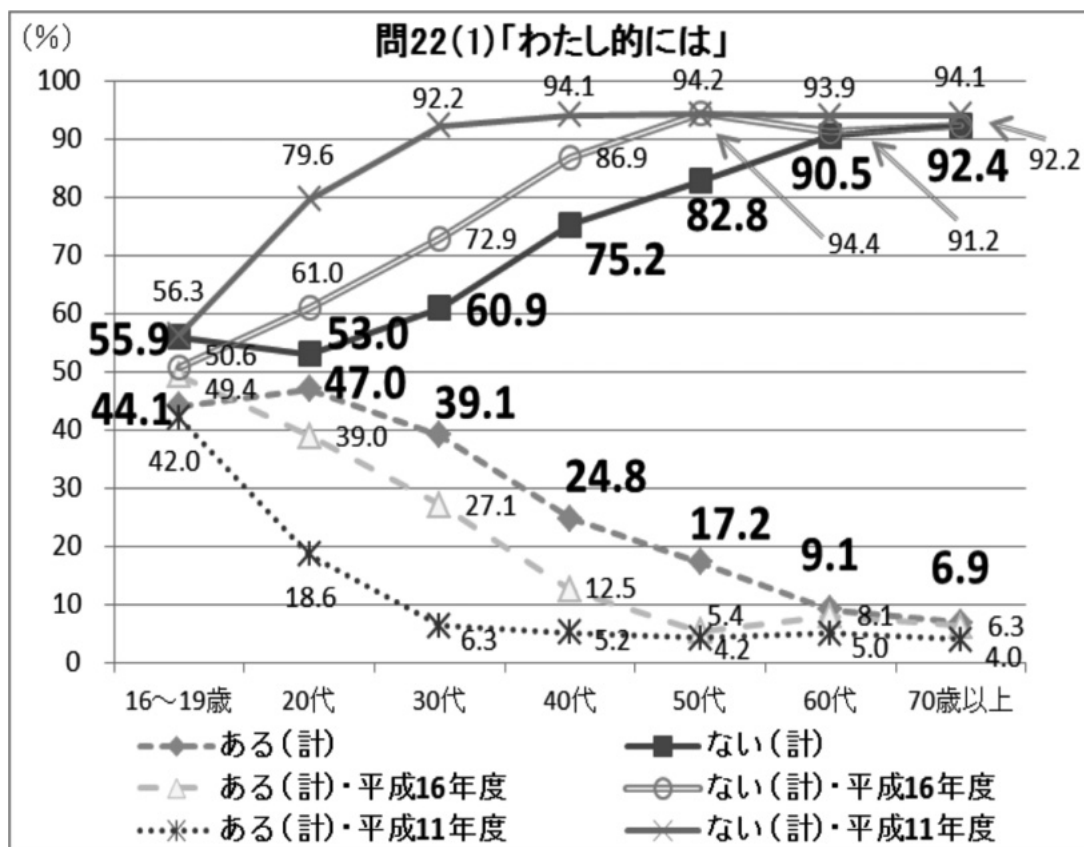
①よく言う	5	( 4.9%)
②ときどき言うことがある	36	(35.0%)
③ほとんど言わない	29	(28.2%)
④言わない	33	(32.0%)

＝跡見女子大学生は、「わたし的には～」という表現を「言わない」か「ほとんど言わない」人のほうが、「よく言う」人や「ときどき言う」人よりも多い＝

跡見女子大学生については、「わたし的には～」という表現を、④言わない人 (32.0%) ③ほとんど言わない人 (28.2%) を合計すると60.2%になる。一方、①よく言う人 (4.9%) ②ときどき言うことがある人 (35.0%) の合計は39.9%で、全体としては、言わない傾向の人の割合が高いことが分かった。ただ最も多いのは、②ときどき言うことがある、という人である。

次頁の〔問22〕(1)は文化庁の国語調査の結果であるが、これを年齢別に分析してみると、「わ

たし的には」という言い方をすることが「よくある」と「時々ある」と回答した人の合計を「ある」でまとめると、その割合は20代で47.0%と高くなっている。跡見女子大学生の39.9%よりも7ポイント近く高い。これを見ても、跡見女子大学生は「わたし的には～」という言い方に対して全国調査の結果よりも慎重な姿勢を持っている人が多いと見られる。今回の全国調査結果を過去の調査結果（平成11、16年度）と比較すると、「ある」の割合は、平成11年度調査から16年度調査に掛けて20代および30代で増加し、今回調査でも更に20代で増加している。しかし、40代、50代、60代と高齢世代になるほど、「わたし的には」という言い方をしない人が増加していることも読み取れ、「わたし的には」は若い世代に多い表現であるといえる。全国的には、使う人と使わない人の割合が、20代の若い世代でほぼ半々ずつの状態から、世代が高くなるごとに使う人の割合が減り、しだいに使わない人の割合が増えていることが読み取れる。



〔問22〕若い世代に多いとされる表現（１）「わたし的には」（文化庁「国語調査」より）

（２）「話とかしていました」

「Aさんと話をしていました」を「Aさんと話とかしていました」と言う

①よく言う	9	( 8.7%)
②ときどき言うことがある	19	(18.4%)
③ほとんど言わない	36	(35.0%)
④言わない	37	(36.0%)

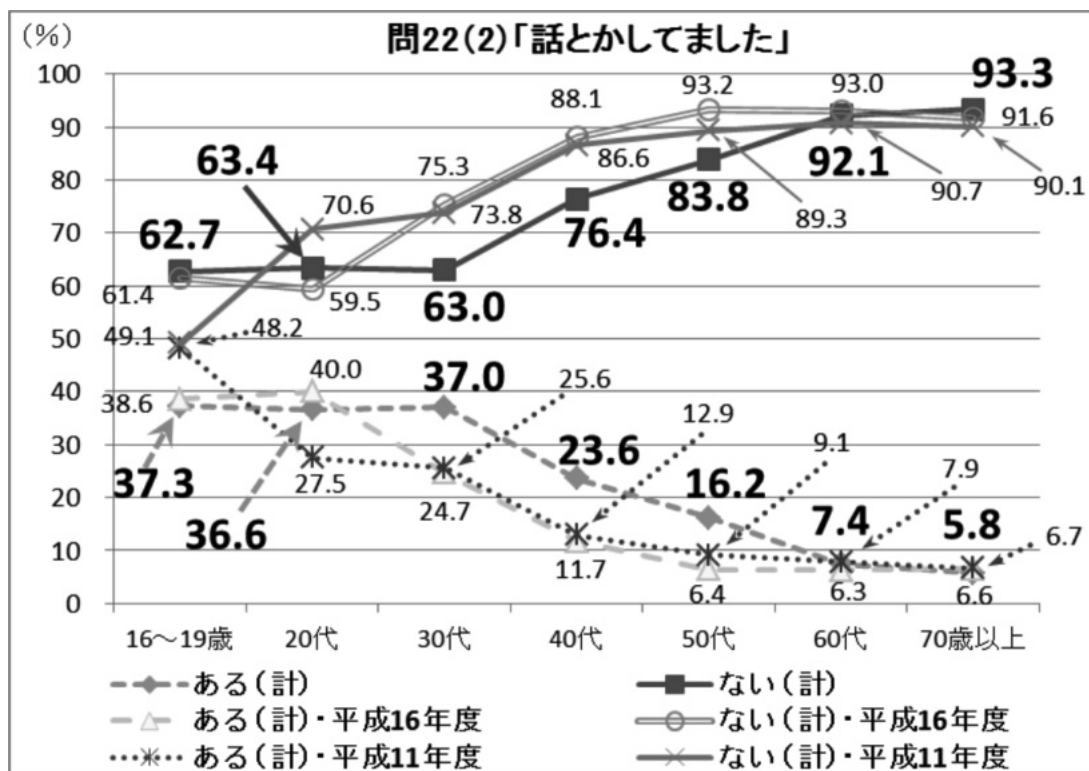
無回答

2 (1.9%)

＝跡見女子大学生は、「話とかしていました」という表現を「言わない」か「ほとんど言わない」人のほうが、「よく言う」人や「ときどき言うことがある」人よりも多い＝

跡見女子大学生は、「話とかしていました」という表現を、④言わない人(36.0%) ③ほとんど言わない人(35.0%)を合計すると71.0%になる。一方、①よく言う人(8.7%) ②ときどき言うことがある人(18.4%)の合計は27.1%で、全体としては、言わない人の割合が高い。最も多いのは、④言わない、という人である。

次の〔問22〕(2)は文化庁の国語調査の結果であるが、これを年齢別に分析してみると、「話とかしていました」という言い方をすることが「ある」人は30代で37%おり、跡見女子大学生は約27%であるから、10ポイント近くも使う人の割合が低い。跡見女子大学生は「話とかしていました」という言い方に対して、慎重な姿勢を持っている人が多いと見られる。今回の全国調査結果を過去の調査結果(平成11、16年度)と比較すると、「ある」の割合は、16～19歳では減少している。「話とかしていました」という言い方は、若者の曖昧表現であると批判する高齢世代が危惧するほど、若い世代で支持を受けているとは読み取れない。この表現は、特定の集団や一部の若者たちの間で使われている表現ではないかと推察する。



〔問22〕若い世代に多いとされる表現(2)「話とかしていました」(文化庁「国語調査」より)

(3)「良かったかな、みたいな…」

「とても良かった」ということを、「良かったかな、みたいな」と言って相手の反応を見る

①よく言う

9 (8.7%)

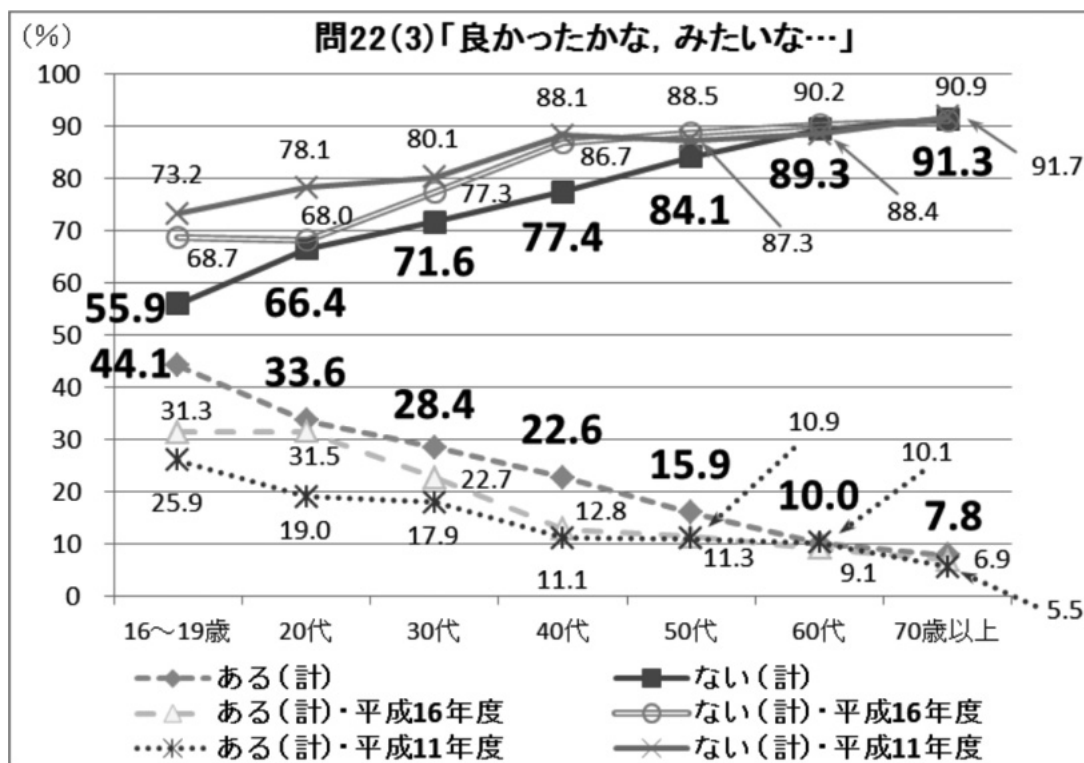


②ときどき言うことがある	25	(24.3%)
③ほとんど言わない	39	(37.9%)
④言わない	30	(29.1%)

＝跡見女子大学生は、「良かったかな、みたいな～」という表現を、「ほとんど言わない」か「言わない」人のほうが、「よく言う」人や「ときどき言う」人よりも多い＝

跡見女子大学生のアンケート結果では、「良かったかな、みたいな」という言い方を、③ほとんど言わない人 (37.9%) と④言わない人 (29.1%) を合計すると67.0%になる。一方、②ときどき言うことがある人 (24.3%) と①よく言う人 (8.7%) の合計は33.0%で、全体としては、言わない人の割合の方が大きい。最も多いのは、③ほとんど言わない、という人である。

次の〔問22〕(3)は文化庁の国語調査の結果であるが、これを年齢別に見ると、「良かったかな、みたいな…」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は、16～19歳で44.1%と最も高くなっていて、20代、30代・・・と世代が上がるにつれてこの表現を使う人の割合が減っていき、グラフは右肩下がりになっている。今回の全国調査の結果を過去の調査結果(平成11、16年度)と比較すると、「ある」の割合は平成11年度調査から今回調査にかけて増加はしているが、世代が上がるにつれてその割合は減っている。同時に、このような表現をしない人も増加しているため、グラフとしては50%を境にして上昇トレンドと下降トレンドで対照的になっている。



〔問22〕若い世代に多いとされる表現 (3)「良かったかな、みたいな」(文化庁「国語調査」より)

#### (4)「やばい」

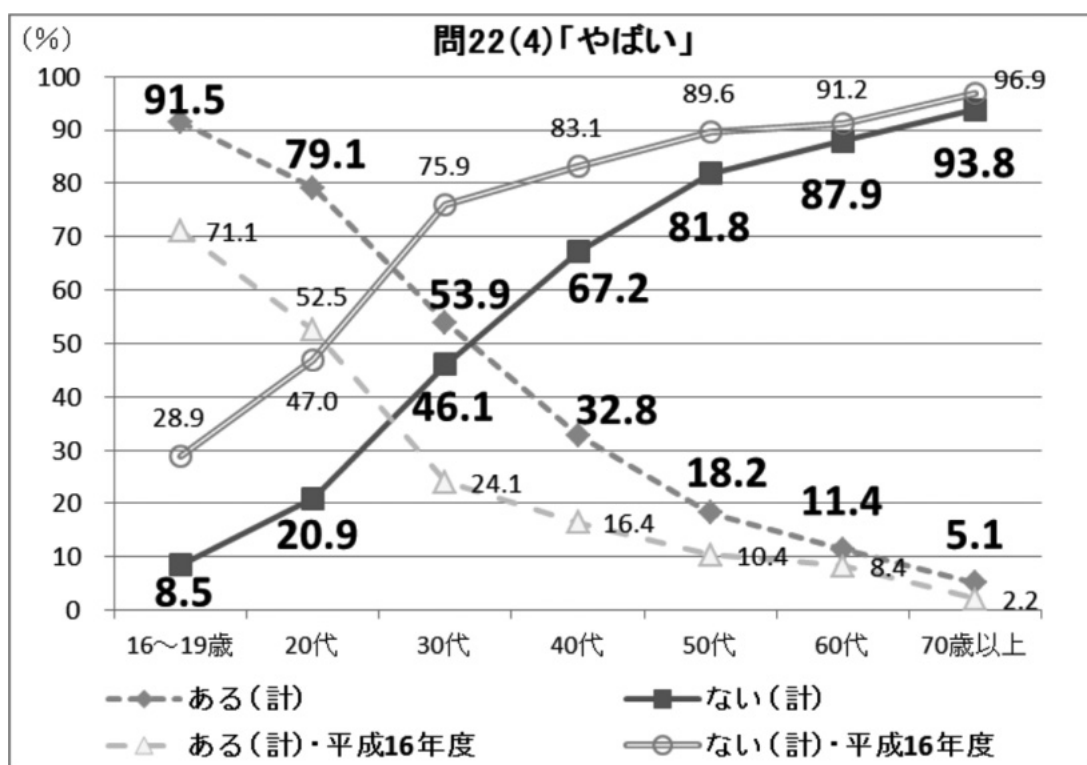
「とてもすばらしい(良い、おいしい、かっこいい等)」という意味で「やばい」という表現

をする

①よく言う	70	(68.0%)
②ときどき言うことがある	24	(23.3%)
③ほとんど言わない	6	(5.8%)
④言わない	3	(2.9%)

＝跡見女子大学生は、「やばい」という言い方を「よく言う」人と「ときどき言う」人を合わせると9割以上になり、良いイメージで「やばい」という表現を使う人が圧倒的に多い＝

跡見女子大学生のアンケート結果では、「やばい」という言い方を、①よく言う人(68.0%)と②ときどき言うことがある人(23.3%)を合計すると91.3%になる。一方、③ほとんど言わない人(5.8%)と④言わない人(2.9%)の合計は8.7%で、全体としては「やばい」という表現を使う人が圧倒的に多いことが分かる。最も多いのは①よく言う、という人である。この「やばい」という表現については、もともと語勢やマイナスイメージが強いためキャンパスではあまり耳にしない表現であるという認識が筆者にあった。そのため、「ほとんど言わない」と「言わない」学生の合計が、本学で9%弱しかいなかったことは筆者の予想とは異なっており、意外な結果であった。学生たちの間で、場面や上下関係に配慮しながら言葉を使い分ける“言語コード”の切換のようなものが働いているのではないだろうか。



〔問22〕若い世代に多いとされる表現(4)「やばい」(文化庁「国語調査」より)

上の〔問22〕(4)は文化庁の平成26年度の国語調査の結果であるが、年齢別に見ると、「とてもすばらしい」という意味で「やばい」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は、

年代が低いほど大きくなる傾向があり、16～19歳で91.5%と最も高く、次いで、20代（79.1%）となっている。今回の全国調査の結果を過去の調査結果（平成16年度）と比較すると、「やばい」という表現を良いイメージで使うことが「ある」人の割合が「ない」人の割合を上回っていたのは平成16年度調査では20代以下だけであったが、今回調査では30代以下とやや世代が高くなり、使うことが「ある」人の年代が少し上がってきていることがわかる。これは、かつて「やばい」という言葉を良いイメージで使っていた若い世代の人が、そのまま世代が上がっても使い続けていることを示しているとも解釈できる。

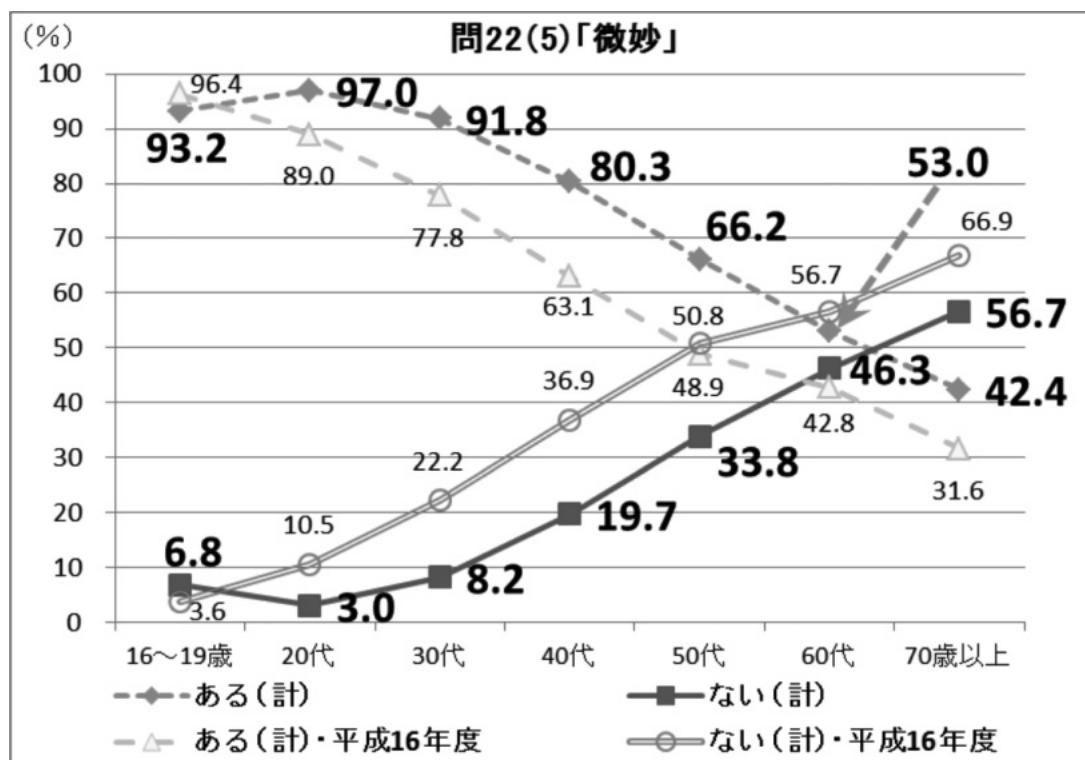
#### （5）「微妙（びみょう）」

良いか悪いかの判断がつかないなどのときに「微妙（びみょう）」と言う

①よく言う	72	(69.9%)
②ときどき言うことがある	25	(24.3%)
③ほとんど言わない	5	(4.9%)
④言わない	1	(1.0%)

＝跡見女子大学生は、「微妙」という言い方をよくする人と、ときどきする人を合わせると9割以上になり、「微妙」という表現を使う人の方が圧倒的に多い＝

跡見女子大学生のアンケート結果では、良いか悪いかの判断がつかないときや、答えを濁したいときに「微妙」という言い方を、①よく言う人（69.9%）と②ときどき言うことがある人（24.3%）を合計すると94.2%になる。一方、③ほとんど言わない人（4.9%）と④言わない人（1.0%）の



〔問22〕若い世代に多いとされる表現（5）「微妙」（文化庁「国語調査」より）

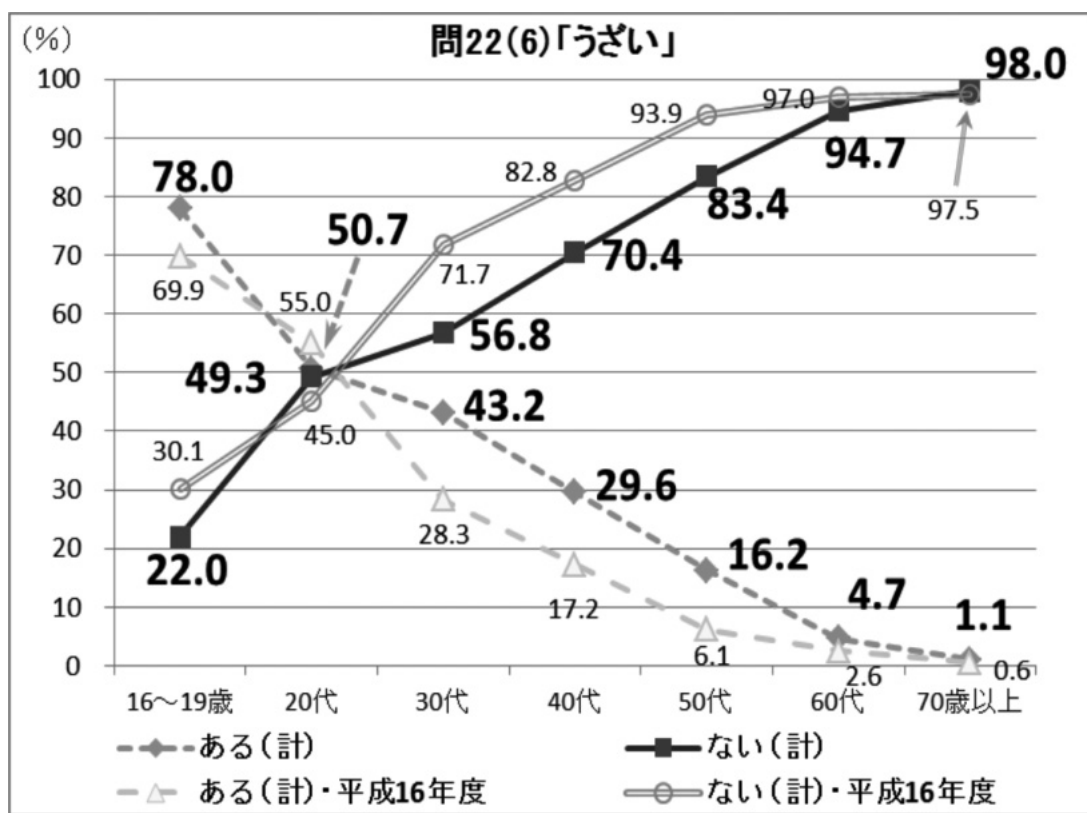
合計は5.9%で、全体としては、「微妙」という表現を使う人が圧倒的に多いことが分かる。最も多いのは、①よく言う、という人である。「やばい」という表現と同様に、この「微妙」という表現を「ほとんど言わない」と「言わない」学生の合計が、本学で6%弱しかいなかったことは、これも筆者の予想とは異なる結果であった。

前掲の〔問22〕(5)は文化庁の国語調査の結果をグラフにしたものであるが、年齢別に見ると、「微妙」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は、20代で97.0%と最も高く、次いで16～19歳(93.2%)、30代(91.8%)で9割台前半となっており、60代(53.0%)で5割台前半、70歳以上(42.4%)でも4割を超えている。また今回の全国調査の結果を過去の調査結果(平成16年度)と比較すると、「ある」の割合が「ない」の割合を上回っているのは、今回の調査では60代以下となっており、「やばい」に比べれば、幅広い世代で「微妙」という表現が使われていることが窺える。

#### (6)「うざい」

面倒くさいことや不快感・嫌悪感を表すときに「うざい」と言う

①よく言う	37	(35.9%)
②ときどき言うことがある	34	(33.0%)
③ほとんど言わない	21	(20.4%)
④言わない	11	(10.7%)



〔問22〕若い世代に多いとされる表現(6)「うざい」(文化庁「国語調査」より)



＝跡見女子大学生は、「うざい」という言い方を、「よく言う」人と「ときどき言う」人を合わせると7割近くになり、「うざい」という表現を使う人がかなり多い＝

跡見女子大学生のアンケート結果では、面倒くさいことや不快感・嫌悪感を表すときに、「うざい」という言い方を、①よく言う人（35.9%）と②ときどき言うことがある人（33.0%）を合計すると68.9%になる。一方、③ほとんど言わない人（20.4%）と④言わない人（10.7%）の合計は31.1%で、全体としては、「うざい」という表現を使う人が跡見女子大学生でもかなり多いことが分かる。しかし、前掲の「やばい」や「微妙」に比べると、その使用頻度は圧倒的ではなく、「うざい」という言葉の響きの中に拒絶的なニュアンスを感じるのか、むしろ「うざい」を使わないという学生たちも30%程度いることが分かる。最も多いのは、①よく言う、という人であり、ときどき言うことがある、という人を合わせると7割近くの学生がこの表現を使っている。女子大学生の間でも「うざい」という言葉は、「やばい」「微妙」という表現と同様に、日常生活の中で一般化しつつあることが窺える。

〔問22〕（6）は文化庁の国語調査の結果をグラフにしたものであるが、今回の全国調査の結果を年齢別に見ると、「うざい」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は、年代が低いほど高くなる傾向があり、16～19歳で78.0%と最も高くなっているが、20代では5割程度、30代以上では5割未満となっている。今回の調査結果を過去の調査結果（平成16年度）と比較すると、「ある」の割合は、20代で4ポイント減少したが、他の全ての年代において、それぞれ1～15ポイント増加している。「うざい」という言い方が若い世代にとどまらず、多くの世代に広がってきていることを読みとることができる。しかし一方で、「うざい」という表現を「よく言う」人と「ときどき言うことがある」人を合わせた「ある」の割合と、「言わない」と「殆ど言わない」人を合わせた「ない」の割合が、ちょうど20代のところでクロスしており、これより上の世代では「ある」の割合が下がり続け、逆に「ない」の割合が世代が上がるに連れて増え続けている。平成16年度の調査でも同様の結果が出ているので、20代のところで「うざい」の使われ方の転換ポイントがあるようだ。

#### 【全体分析と考察】

今回の跡見学園女子大学の「国語・コミュニケーションに関するアンケート調査」では、会話の中で聞かれる言い方から6つの例を挙げて、それぞれの言い方をすることがあるか、それともないかを調べた。それぞれの下線部について「よく言う」の割合を見ると、（5）「微妙」が69.9%、（4）「やばい」が68.0%と6割台後半となっていて、跡見女子大学生の間でも流行表現の一部は相当浸透していることがわかった。

文化庁の全国調査では、今回結果と過去の全国調査結果（平成11、16年度）とを比較すると、（1）「わたし的には」では、「ある」の割合は平成11年度調査から16年度調査にかけて7ポイントの増加、今回調査でも更に4ポイント増加しているので、「わたし的には」の言い方は浸透してきていると言える。また（3）「良かったかな、みたいな…」では、「ある」の割合は、平成11年度調査から16年度調査にかけて2ポイント増加し、今回調査で更に3ポイント増加している。跡見女子大学生の調査結果では「ない＝使わない」学生も一定数いたが、全国調査では若者表現として認知されているようだ。（4）「やばい」では、「ある」の割合は前回より9ポイント、（5）「微妙」では「ある」の割合が8ポイント、（6）「うざい」では「ある」の割合が3ポイントそれぞれ増加している。一方で跡見女子大学生は、全国調査と比較すると、表現によっては、自分が使うことに対して慎重な姿勢をとっている言葉もあることが、今回の調査で判明した。

### 3) 漢字を用いた語と外来語の使用頻度について

日常生活の中で同じような文脈で用いられることのある「漢字を用いた語」と「カタカナ語」の組合せの10項目について、漢字の語とカタカナ語のどちらを使うかを尋ねた。跡見女子大学生のアンケート結果について分析していく。

【質問】次の同じ意味の「漢字」の言葉と「外来語」の言葉のどちらをよく使いますか？

1) 「必要性」と「ニーズ」	回答数	割合
①必要性	55	(53.4%)
②ニーズ	12	(11.7%)
③どちらも使う	26	(25.2%)
④分からない	10	(9.7%)

＝跡見女子大学生の場合、「必要性」と「ニーズ」では、「必要性」を使う学生が半数以上いるが、どちらも使う学生が全体の4分の1いる＝

2) 「取り消し」と「キャンセル」	回答数	割合
①取り消し	2	(1.9%)
②キャンセル	67	(65.0%)
③どちらも使う	32	(31.1%)
④分からない	2	(1.9%)

＝跡見女子大学生の場合、「取り消し」と「キャンセル」では、「キャンセル」というカタカナ語を使う学生が3分の2を占める。「取り越し」という漢字言葉を使う人はほとんどおらず、どちらも使う学生が3分の1いる＝

3) 「利点」と「メリット」	回答数	割合
①利点	4	(3.9%)
②メリット	69	(67.0%)
③どちらも使う	25	(24.3%)
④分からない	5	(4.9%)

＝跡見女子大学生の場合、「利点」と「メリット」では、カタカナ語の「メリット」を使う学生が3分の2を占めるが、どちらも使う学生が4分の1いる＝

4) 「危険性」と「リスク」	回答数	割合
①危険性	11	(10.7%)
②リスク	50	(48.5%)
③どちらも使う	34	(33.0%)
④分からない	8	(7.8%)

＝跡見女子大学生の場合、「危険性」と「リスク」では、「リスク」を使う学生がほぼ半数、どちらも使う学生が3分の1いるが、「危険性」という漢字言葉を使う学生は1割程度＝

5) 「合意」と「コンセンサス」	回答数	割合
①合意	77	(74.8%)
②コンセンサス	1	(1.0%)
③どちらも使う	0	(0.0%)
④分からない	25	(24.3%)

＝跡見女子大学生の場合、「合意」と「コンセンサス」では、圧倒的に漢字言葉の「合意」を使う学生が多く、「コンセンサス」というカタカナ語を使う学生はほとんどいない。それは「コ

ンセンス」という言葉の意味がよく理解できない学生が多いことも要因のひとつとも考えられる＝

6) 「優先順位」と「プライオリティ」

①優先順位	90	(87.4%)
②プライオリティ	1	(1.0%)
③どちらも使う	4	(3.9%)
④分らない	8	(7.8%)

＝跡見女子大学生の場合、「優先順位」と「プライオリティ」では、「優先順位」を使う学生がほとんど（9割近く）で、「プライオリティ」を使う学生はほぼいない。跡見女子大学生にとって、「プライオリティ」という言葉は耳馴染みの薄いカタカナ語であるようだ＝

7) 「基本計画」と「マスタープラン」

①基本計画	81	(78.6%)
②マスタープラン	1	(1.0%)
③どちらも使う	0	(0.0%)
④分らない	21	(20.4%)

＝跡見女子大学生の場合、「基本計画」と「マスタープラン」では、「基本計画」という漢字言葉を使う学生が圧倒的で、「分らない」を選択した学生の割合（2割）からすると、「マスタープラン」の意味が分らない学生もいると考えられる＝

8) 「技能」と「スキル」

①技能	9	(8.7%)
②スキル	49	(47.6%)
③どちらも使う	42	(40.8%)
④分らない	3	(2.9%)

＝跡見女子大学生の場合、「技能」と「スキル」では、「スキル」のほうが「技能」よりも使い慣れているようだが、「技能」と「スキル」の両方を使う学生も半数近くいる＝

9) 「技術革新」と「イノベーション」

①技術革新	39	(37.9%)
②イノベーション	21	(20.4%)
③どちらも使う	10	(9.7%)
④分らない	33	(32.0%)

＝跡見女子大学生の場合、「技術革新」と「イノベーション」では、「技術革新」のほうが優勢だが、「イノベーション」と「技術革新」の意味がほぼ同じであると分らないと思われる学生もいると思われる＝

10) 「災害予想地図」と「ハザードマップ」

①災害予想地図	40	(38.8%)
②ハザードマップ	21	(20.4%)
③どちらも使う	14	(13.6%)
④分らない	28	(27.2%)

＝跡見女子大学生の場合、「災害予想地図」と「ハザードマップ」では「災害予想地図」のほうが言葉の意味がよく理解できるようだ。官公庁や自治体がしきりに公文書で使っている「ハザードマップ」は2割程度の学生にしか使われておらず、浸透度はまだ低いと言わざるを得ない＝

### 【全体分析】

跡見女子大学生が「カタカナ語」よりも「漢字を用いた語」を使うという言葉は、調査項目の中では、「必要性」「合意」「優先順位」「基本計画」「技術革新」「災害予想地図」の6項目で、最も高いのは「優先順位」(87.4%)、次いで「基本計画」(78.6%)、「合意」(74.8%)であった。一方「カタカナ語を使う」という言葉は「キャンセル」「メリット」「リスク」「スキル」の4項目で、5割以上の支持を得た言葉は、高い順に「メリット」(67.0%)と「キャンセル」(65.0%)の2語であった。跡見学園女子大学生の場合は、格好の良さから「カタカナ語」をよく使うというような傾向は見られず、多くの項目で、「漢字を用いた語」を使う傾向が読み取れる。

文化庁の全国国語調査の結果でも「漢字を用いた語を使う」という言葉は「優先順位」が89.6%で最も高く、ほかの全ての項目においても「漢字言葉を使う」という回答が5割を超えている。一方「カタカナ語を使う」という割合が最も高い言葉は「ハザードマップ」(25.3%)で、次いで「メリット」(19.2%)となっている。これらの言葉については簡単な意味説明や言い換えを付加したり、PRを強めたりして浸透度を深める必要があると考える。

### 4) 新しい複合語、省略語について

最近よく耳にする新しい複合語、省略語について、次の6つの言い方を挙げて、その複合語、省略語を聞いたことがあるか、使うことがあるかを尋ねた。以下に、跡見女子大学のアンケート結果について報告し、項目ごとに分析する。

【質問】あなたは、次の言い方を聞いたことがありますか。また使いますか。

#### 1) 「就活」

①聞いたことがある	36	(35.0%)
②聞くが使わない	3	(2.9%)
③自分で使う	64	(62.1%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)

＝跡見女子大学生の中では、「就活」は「女子力」に次いで2番目によく使われている新しい複合語で、跡見生の3分の1(62.1%)が使っている。年次による属性分析も行ったが、3年生、4年生がよく使っているという結果が出た。就職活動の有無との関連があると思われる＝

#### 2) 「婚活」

①聞いたことがある	47	(45.6%)
②聞くが使わない	23	(22.3%)
③自分で使う	33	(32.0%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)

＝跡見女子大学生は、「婚活」という言葉を聞いたことがあるという学生が半数近くいたが、実際に使う学生たちは3分の1程度しかいなかった。いわゆる“婚期”や年齢との関係もあるのだろうか、身近な言葉という認識は薄いようだ＝

#### 3) 「イクメン」

①聞いたことがある	49	(47.6%)
②聞くが使わない	26	(25.2%)
③自分で使う	27	(26.2%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)
無回答	1	(1.0%)



＝跡見女子大学生の場合、「イクメン」という省略語を聞いたことがある人は半数近くいるものの、「聞くが使わない」という人を合わせると72.8%と、7割を超える人が「使わない」学生であると思われる。結婚生活の中で多く使われるこのような言葉は、女子大学生にはまだ現実感がないのかもしれない＝

#### 4) 「女子力」

①聞いたことがある	35	(34.0%)
②聞くが使わない	2	(1.9%)
③自分で使う	66	(64.1%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)

＝今回のこの調査で挙げた7つの新しい複合語、省略語のうち、跡見女子大学生が最もよく使う言葉が「女子力」であった。「聞いたことがある」という人も34%いる。「聞いたことがある」という割合が、そのまま「自分で使う」という人の数字に結びついていないところをみると、跡見女子大学生は、“流行語”ともいわれる「女子力」という言葉を全員が使っているという状況でもないことが判明した。また「女子力」という言葉そのもののものに「子どものままでいたい“かわいい少女”感」や「ジェンダーの押し付けにつながる男性社会側からの“におい”」を感じとって、「使いたくない」という学生が相当数いることも、関連の聞き取り調査で明らかになっている＝

#### 5) 「デパ地下」

①聞いたことがある	38	(36.9%)
②聞くが使わない	6	(5.8%)
③自分で使う	59	(57.3%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)

＝すでに一般的な省略語になっていると思われる「デパ地下」も、跡見女子大学生が自分自身で使う割合は57.3%で、圧倒的な使われ方をしているわけでもない＝

#### 6) 「大人買い」

①聞いたことがある	26	(25.2%)
②聞くが使わない	13	(12.6%)
③自分で使う	63	(61.2%)
④聞いたことがない	1	(1.0%)

＝「大人買い」という言葉を使っている学生は、跡見女子大学生の場合61.2%で、全体の3分の2近くの学生である。「聞いたことがある」「聞くが使わない」割合を合計すると38%近くになる。学費を親から出してもらっていたり、アルバイトの収入を生活費に当てたりしている学生が多い状況では、「大人買い」の状況そのものが少し縁遠い感覚があるのかもしれない＝

#### 7) 「クールビズ」

①聞いたことがある	46	(44.7%)
②聞くが使わない	18	(17.5%)
③自分で使う	39	(37.9%)
④聞いたことがない	0	(0.0%)

＝跡見女子大学生の場合、自分でこの「クールビズ」という言葉を使うのは3分の1強である。

「クールビズ」は官公庁や自治体、マスコミなどでよくPRされているが、ややお役所言葉のように受け止められているのか、学生の実生活の中まではそれほど届いていない表現かもし

れない＝

### 【全体分析】

最近よく使われるとされる新しい複合語、省略語のうち、跡見女子大学生が自分で最もよく使う語は「女子力」(64.1%)、次いで「就活」(62.1%)、「大人買い」(61.2%)、「デパ地下」(57.3%)で、「婚活」や「イクメン」はあまり使われていない現状が浮かび上がった。今回の調査語は、文化庁が全国国語調査で選出した生活に身近な「就活」「婚活」「イクメン」「女子力」「デパ地下」「大人買い」「クールビズ」の7語で、そのまま跡見女子大学生の調査でも調査語として使わせていただいた。しかし、本学学生の場合は、自分たちの生活に深く関わっている言葉をネットなどで見つけ出して集中的に使う傾向が普段から見られるため、性別や年齢、生活スタイルの面で縁遠い言葉には、例えばマスコミなどでもてはやされたり役所が意図的に流行らせようとしていたりしても、学生はすぐには飛びつかないかむしろ拒否的な反応さえ見せる場合も窺える。

### 5) 慣用句の意味・言い方について

使い方や意味において、いま混乱が見られると思われる次の4つの慣用句を挙げ、後掲の選択肢の中から、意味や使い方を尋ねた。

#### 1) 「おもむろに」の意味

①「ゆっくりと」	22	(21.4%)
②「不意に」	57	(55.3%)
③①②の両方の意味	7	(68.0%)
④他の意味	3	(2.9%)
⑤分からない	12	(11.7%)
無回答	2	(1.9%)

＝跡見女子大学生は「おもむろに」の意味を、半数以上が「不意に」の意味で使っている＝  
跡見女子大学生のアンケート結果では②「不意に」という回答が最も多く、55.3%と半数以上の学生がこの意味で使っている。次いで①「ゆっくりと」の意味で21.4%が使っている。辞書などで本来の意味とされるのは①の「ゆっくりと」で、文化庁の全国調査では①「ゆっくりと」が44.5%、②「不意に」は40.8%と、全国では「おもむろに」をほぼ辞書の意味どおりに使っている。一方跡見女子大学生は、本来の意味とは異なる使い方をしてる学生が多いという結果である。

文化庁の全国国語調査の結果を参考にしながら、調査した項目の年度による変化を分析する。

〔問24〕慣用句の意味・使い方について(1)は、「おもむろに」の調査結果をグラフ化したものである。これを年齢別に見ると、本来の意味とされる「ゆっくりと」と答えた人の割合は、60代で約6割(59.8%)、70歳以上で7割前半(73.0%)となり、「不意に」の割合を50代～60代で逆転し、60代で36ポイント、70歳以上で66ポイントそれぞれ上回っている。50代以下では「不意に」の割合が「ゆっくりと」の割合を上回り、40代以下では「不意に」の割合が6割前半～約7割となっている。この結果をみると、60代以上の高齢者が本来の意味で使っていることが読み取れ、それ以下の世代では本来の意味を間違っていることが分かる。

#### 2) 「枯れ木も山のにぎわい」の意味

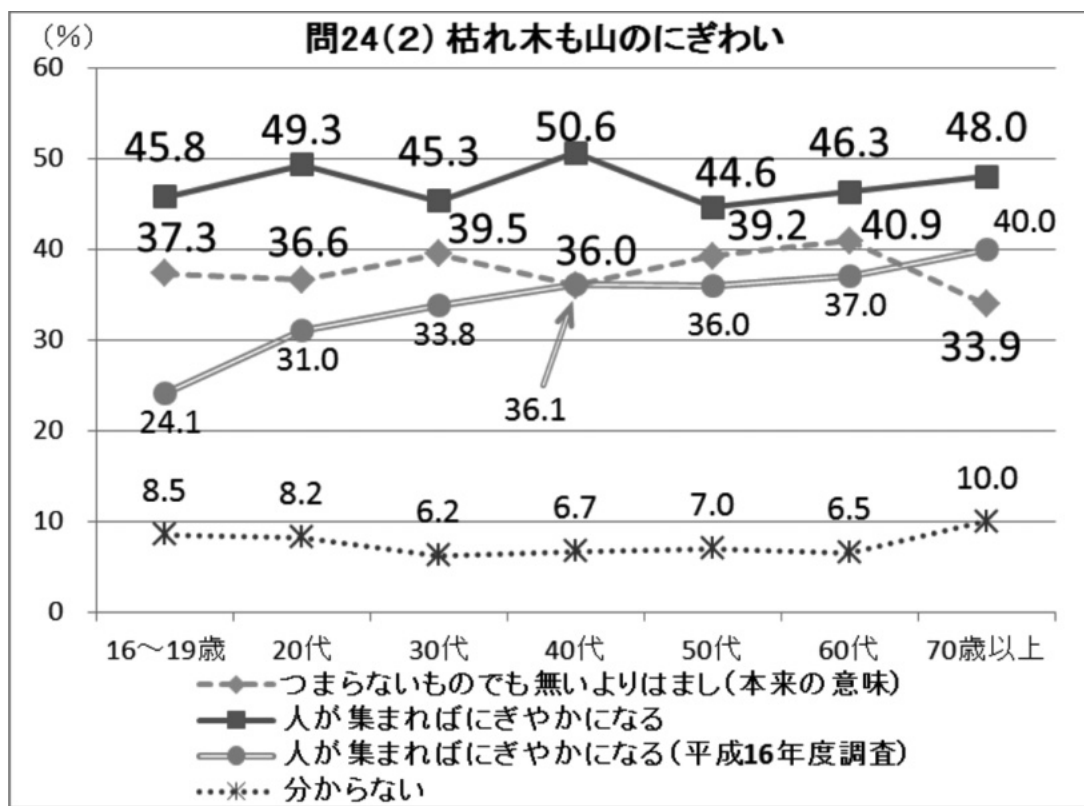
①「つまらないものでも無いよりはまし」	27	(26.2%)
②「人が集まればにぎやかになる」	21	(20.4%)

③ ①②の両方の意味	2	( 1.9%)
④ 他の意味	2	( 1.9%)
⑤ 分からない	50	(48.5%)
無回答	1	( 1.0%)

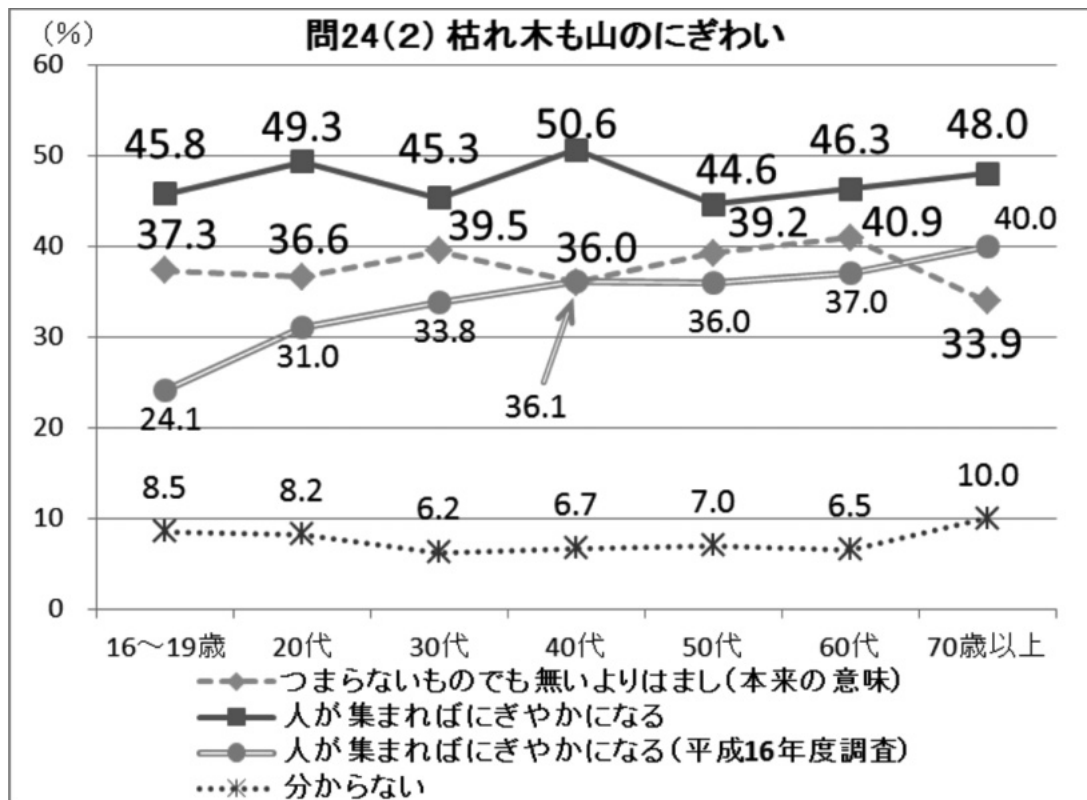
＝跡見女子大学生は「枯れ木も山のにぎわい」の意味を半数が「わからない」と答えた＝

跡見女子大学生の半数は、この慣用句を普段使っていないか耳にしていなくて、半数がこの慣用句の意味を「分からない」と回答している。そして、この慣用句を使う人では、①「つまらないものでも無いよりはまし」の意味で使っている人のほうが、②「人が集まればにぎやかになる」という意味で使う人よりは多いことが分かった。辞書などで本来の意味とされるのは、①「つまらないものでも無いよりはまし」であるので、跡見女子大学生は本来の意味で使っている人の割合が少し多いことを示している。

〔問24〕慣用句の意味・使い方について（2）は、「枯れ木も山のにぎわい」の文化庁「国語調査」の結果をグラフ化したものである。それによれば、同じ問に対して、②「人が集まればにぎやかになる」と答えた人が47.2%、①「つまらないものでも無いよりはまし」という人は37.6%で、本来の意味とは違う意味を選択した割合のほうが高かった。平成16年度の同じ国語調査では、本来の「つまらないものでも無いよりはまし」の意味で使う人の割合が38.6%、②「人が集まればにぎやかになる」という意味で使う人が35.5%だったので、このときは本来の意味で使っていた人が少し上回っていた。しかし、今回はその結果が逆転したことになり、10年ほどの間に、本来の意味ではない使い方が全国的に増え、本来の使い方を上回ったことになる。



〔問24〕慣用句の意味・使い方について（2）「枯れ木も山のにぎわい」（国語調査）



〔問24〕慣用句の意味・使い方について(2)「枯れ木も山のにぎわい」(国語調査)

また年齢別に見ると、本来の意味とされる「つまらないものでも無いよりはまし」の割合は、全ての年代において3割台から4割台となっている。過去の調査結果(平成16年度)と比較すると、「人が集まればにぎやかになる」の割合は、全ての年代において8～22ポイント増加している。高齢者でも、本来の意味でこの慣用句を使う人が減ってきていることが注目される。

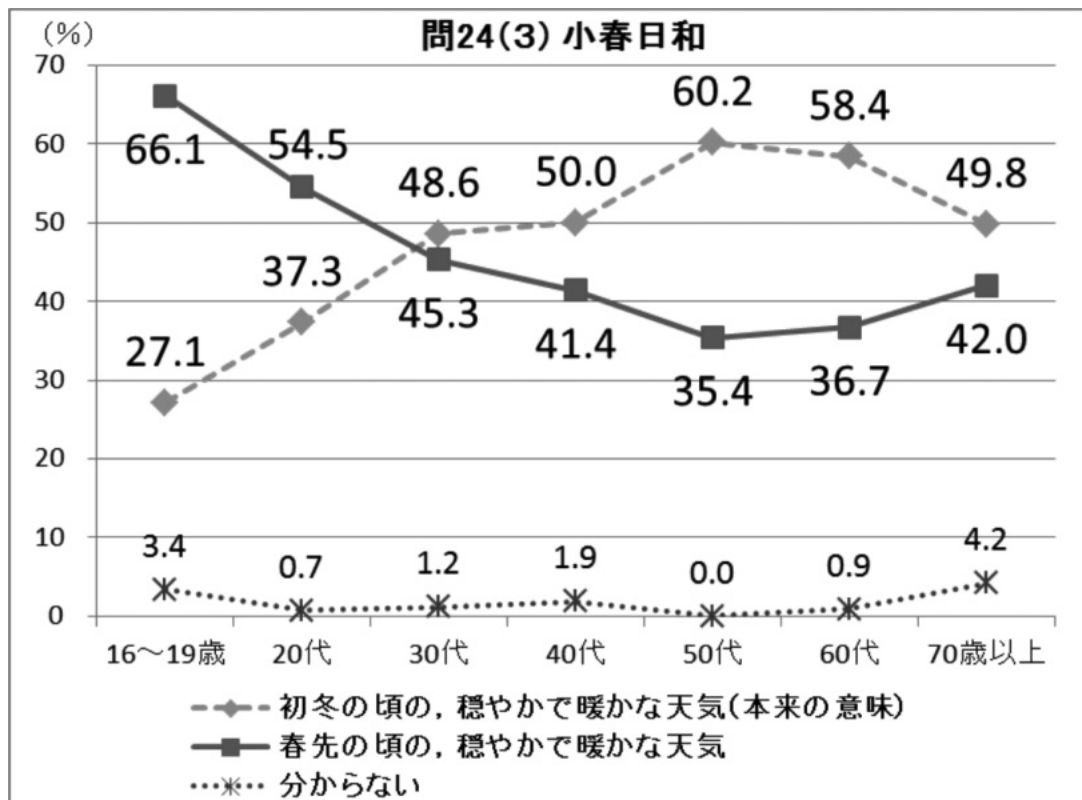
### 3) 「小春日和」の意味

①「初冬の頃の穏やかで暖かな天気」	33	(32.0%)
②「春先の頃の穏やかで暖かな天気」	51	(49.5%)
③ ①②の両方の意味	4	(3.9%)
④他の意味	0	(0.0%)
⑤分からない	13	(12.6%)
無回答	2	(1.9%)

＝跡見女子大学生は、「小春日和」の意味を「春先の頃の穏やかで暖かな天気」と考えている＝  
 跡見女子大学生は、「小春日和」の意味を②「春先の頃の穏やかで暖かな天気」と回答した学生が49.5%とほぼ半数おり、①「初冬の頃の穏やかで暖かな天気」と答えた割合は3割強(32%)であった。辞書などで本来の意味とされるのは①「初冬の頃の穏やかで暖かな天気」であるから、半数の学生が「小春日和」という言葉を本来の意味とは異なる意味で使っていることになる。

〔問24〕慣用句の意味・使い方について(3)は、「小春日和」の文化庁の全国調査結果をグラ





〔問24〕慣用句の意味・使い方について(3)「小春日和」(文化庁「国語調査」より)

フ化したものだが、本来の意味である①「初冬の頃の穏やかで暖かな天気」と答えた人が51.7%、②「春先の頃の穏やかで暖かな天気」という人は41.7%で、全国的には、本来の意味で使っている人の方が多かった。年齢別に見ると、本来の意味とされる「初冬の頃の穏やかで暖かな天気」の割合は50～60代で他の年代より高く、6割前後となっている。「春先の頃の穏やかで暖かな天気」の割合は、16～19歳で66.1%、20代で54.5%と他の年代より高く、5割を超えている。「小春日和」については、年代が高いほど本来の意味で使い、若い世代ほど誤解した形でこの慣用句を使っていることがわかる。

#### 4) 「天に唾(つば)する」の意味

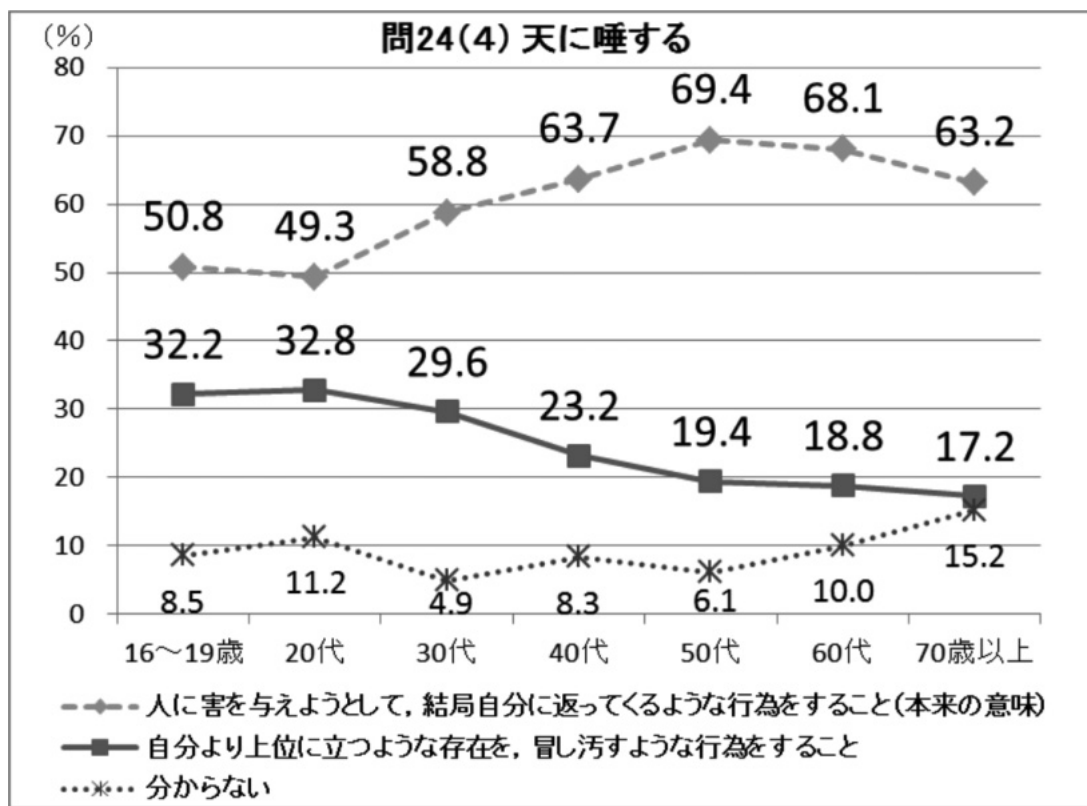
①「自分より上位に立つような存在を汚すような行為をすること」	16	(15.5%)
②「人に害を与えようとして結局自分に返ってくるような行為をすること」	24	(23.3%)
③ ①②の両方の意味	0	(0.0%)
④他の意味	1	(1.0%)
⑤分からない	61	(59.2%)
無回答	1	(1.0%)

＝跡見女子大学生は、「天に唾(つば)する」という慣用句の意味を、「分からない」と回答した学生が6割近くいて、使う人の中では「人に害を与えようとして結局自分に返ってくるような行為をすること」と解釈している人が多い＝

跡見女子大学生は、「天に唾（つば）する」という慣用句を普段聞いたことがないか使ったことのない人が多いためか、「わからない」と答えた人が59.2%と6割近くにのぼった。この慣用句を使う人の中では「人に害を与えようとして結局自分に返ってくるような行為をすること」（23.3%）と答えた人のほうが、「自分より上位に立つような存在を汚すような行為をすること」（15.5%）と答えた人より多い。辞書などで本来の意味とされるのは、「人に害を与えようとして結局自分に返ってくるような行為をすること」であるから、この慣用句を使う跡見女子大学生は、ほぼ本来の意味で使っているというということになる。

文化庁の全国国語調査では、本来の意味で使っている人が63.5%、「自分より上位に立つような存在を汚すような行為をすること」という意味で使っている人が22.0%なので、本来の意味でこの慣用句を使っている人のほうが3倍多いという結果である。

〔問24〕慣用句の意味・使い方について（4）は、文化庁の全国国語調査の中の「天に唾する」の結果をグラフ化したものである。年齢別に見ると、本来の意味とされる「人に害を与えようとして、結局自分に返ってくるような行為をすること」の割合は、50～60代で他の年代より高く7割弱となっている。一方、「自分より上位に立つような存在を、冒し汚すような行為をすること」の割合は、30代以下で他の年代より高く3割前後となっている。年代別にみると、「天に唾する」という慣用句は、70代以上の高齢者よりは50～60代の年代の方が、本来の意味で使っている割合が高かったという結果になった。



〔問24〕慣用句の意味・使い方について（4）「天に唾する」（文化庁「国語調査」より）

### 【全体分析】

今回の文化庁の全国国語調査では、尋ねた4つの慣用句のうち、2)「枯れ木も山のにぎわい」は、本来とは違う使われ方をされているという結果となった。過去の調査結果（平成16年度）と比較すると、2)「枯れ木も山のにぎわい」では、本来の意味ではない方を選択した割合が今回は12ポイント増加している。また、今回の跡見女子大学生の調査と全国調査の結果を比較考量すると、跡見女子大学生は「おもむろに」と「小春日和」を本来の意味とは異なる意味で使い、「枯れ木も山のにぎわい」と「天に唾（つば）する」という慣用句では、「分からない」という理由で、その使い方や意味を選択しなかった。この結果から、跡見女子大学生は、日本語としての重要な教えを含むとされて伝えられてきた慣用句には普段の生活の中であまり接触していないか、または慣用句から縁遠い毎日を送っていることが想像できる。本学学生には、ぜひ重要な慣用句や国語の常識的知識の涵養につとめる必要があると筆者は考える。

### 6) 慣用表現について

この項では、思い込みや勘違いをされて使われているのではないかとと思われる4つの慣用表現を挙げ、後掲の5つの選択肢の中から回答するよう質問した。

【質問】あなたは、次のような意味を伝えようとするときに、どのような表現を使いますか。

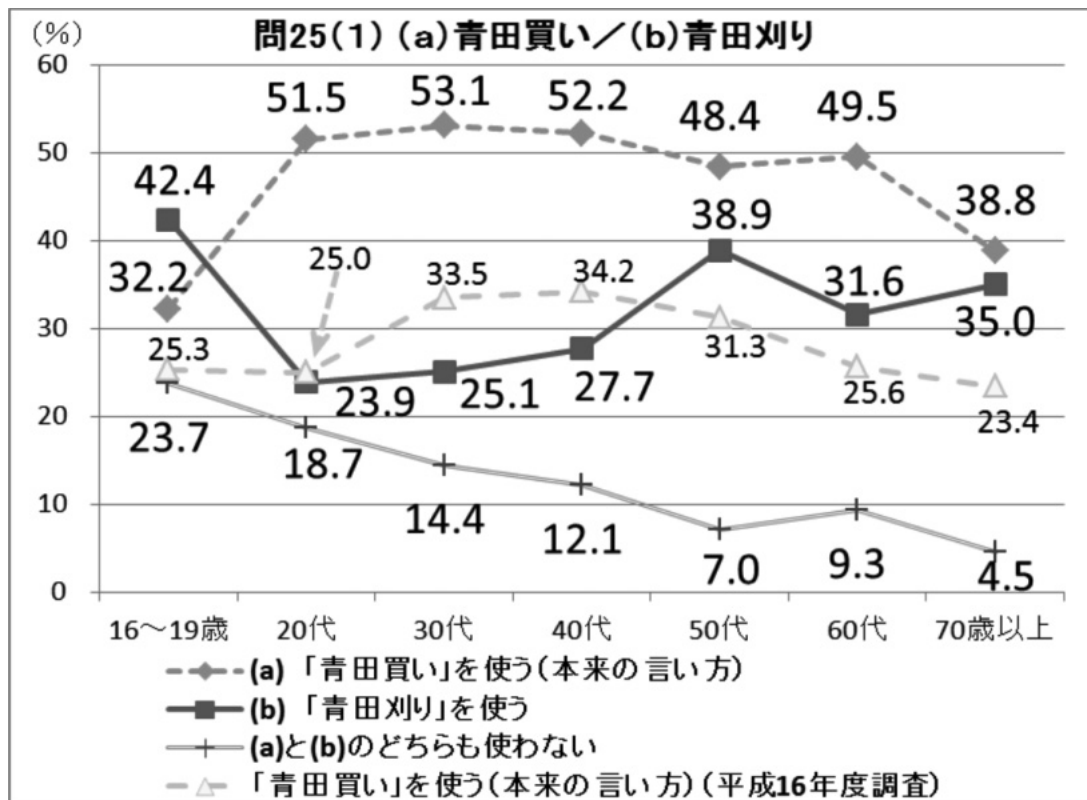
1)「企業が学生を早い時期に採用すること」を伝えるときに使う表現は？

①「青田買い」	21	(20.4%)
②「青田刈り」	23	(23.3%)
③ ①②の両方とも使う	0	(0.0%)
④ ①②のどちらも使わない	20	(19.4%)
⑤ 分からない	38	(36.9%)
無回答	1	(1.0%)

＝跡見女子大学生は、「企業が学生を早い時期に採用すること」を伝えようとするときに使う表現は、「青田刈り」と回答した学生が「青田買い」とした学生よりも若干多い＝

跡見女子大学生は、この質問では「分からない」と回答した人が最も多かったが、こうした表現を使う学生の中では「青田刈り」という言い方をする学生がわずかだが多かったという結果である。辞書などで本来の慣用表現とされるのは「青田買い」の方であるから、跡見女子大学生は覚え違いをしているか、意味を知らずに使っていることになる。ただ、ここ1～2年、学生の就職活動の時期が大きく前後し、企業によっても異なる採用状況になってきたりしていることなどから、こうした企業の採用時期に関する表現が一律に言えなくなってきたりしており、そのため学生の関心が薄くなっているのではないかと推測できる。

文化庁の国語調査では、「青田買い」が47.1%、「青田刈り」が31.9%で、本来の表現を使っている人が多かった。次の〔問25〕慣用表現について（1）「青田買い／青田刈り」は、その結果をグラフにしたものだが、これを年齢別に見ると、本来の言い方とされる「青田買い」の割合は20～60代で5割前後で、16～19歳と70歳以上では3割台となっている。また16～19歳では、「青田刈り」(42.4%)の割合が、本来の言い方とされる「青田買い」(32.2%)を10ポイント上回っていて、若年層ほど間違っ使っているケースが多いようだ。今回の調査結果を過去の調査結果（平成16年度）と比較すると、「青田買い」の割合は、全ての年代で前回よりも高くなっている。特に20代で27ポイント高くなっている。社会の様々な場面で“誤用”の指摘が行われて正しい慣用表現の方が広まったため、それが数字に表れているのではないかと考えられる。



〔問25〕慣用表現について(1)「ア田買い／ア田刈り」(文化庁「国語調査」より)

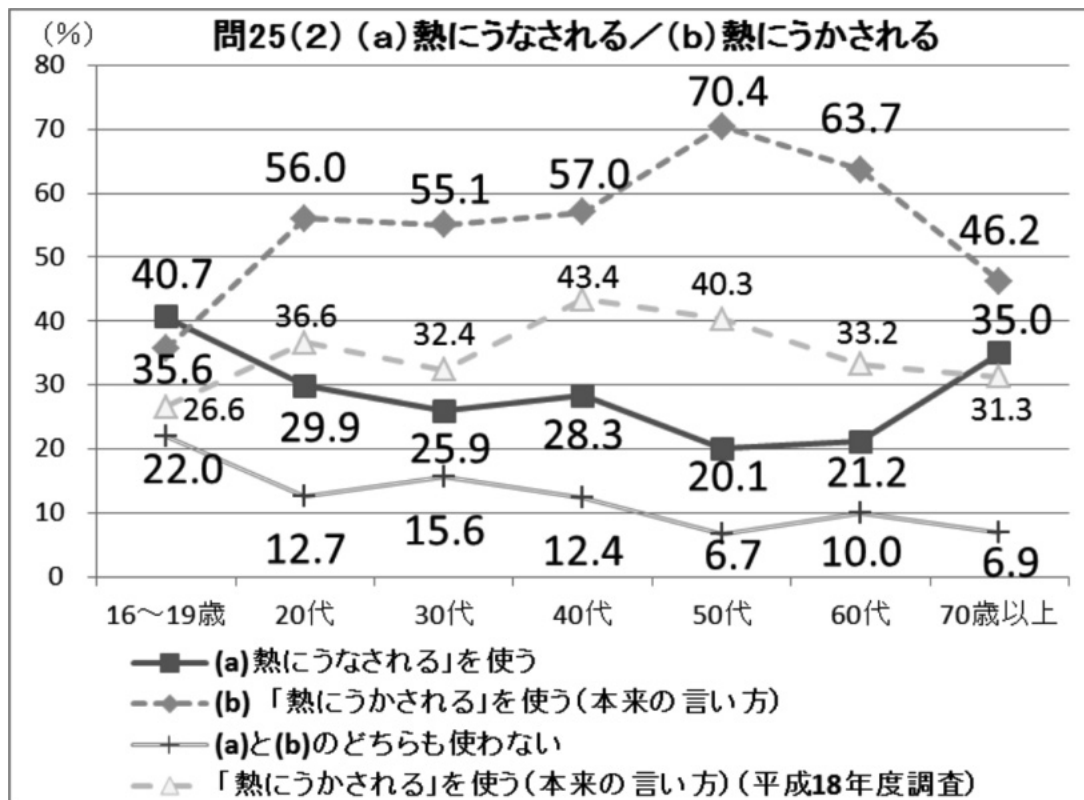
2)「夢中になって見境(みさかい)がなくなること」を伝えるときの表現は？

- |               |    |         |
|---------------|----|---------|
| ①「熱にうなされる」    | 22 | (21.4%) |
| ②「熱にうかされる」    | 23 | (23.3%) |
| ③ ①②の両方とも使う   | 0  | (0.0%)  |
| ④ ①②のどちらも使わない | 28 | (27.2%) |
| ⑤ 分からない       | 29 | (28.2%) |

＝跡見女子大学生は、「夢中になって見境がなくなること」を伝えるときに使う表現は、「熱にうなされる」「熱にうかされる」ともに半数ずついる＝

跡見女子大学生は、この質問でも「分からない」と回答した人が最も多かった(28.2%)が、こうした表現を使う学生の中では「熱にうなされる(21.4%)」という表現と「熱にうかされる(23.3%)」という表現が半々で使われていることが分かった。辞書などで本来の慣用表現とされるのは「熱にうかされる」の方であるが、跡見女子大学生はあまり意識せずに使っているのではないかと考えられる。文化庁の全国国語調査では「熱にうなされる」が27.1%、「熱にうかされる」が57.2%で、本来の表現を使っている人が30ポイントも多かった。

〔問25〕慣用表現について(2)は、本項目の「熱にうなされる／熱にうかされる」全国調査の結果をグラフにしたものだが、これを年齢別に見ると、本来の言い方とされる「熱にうかされる」の割合は50～60代で他の年代より高く、6割を超えている。「熱にうなされる」の割合は16～19歳で4割強となり、本来の言い方とされる「熱にうかされる」を5ポイント上回っている。



〔問25〕慣用表現について(2)「熱にうなされる／熱にうかされる」(文化庁「国語調査」より)

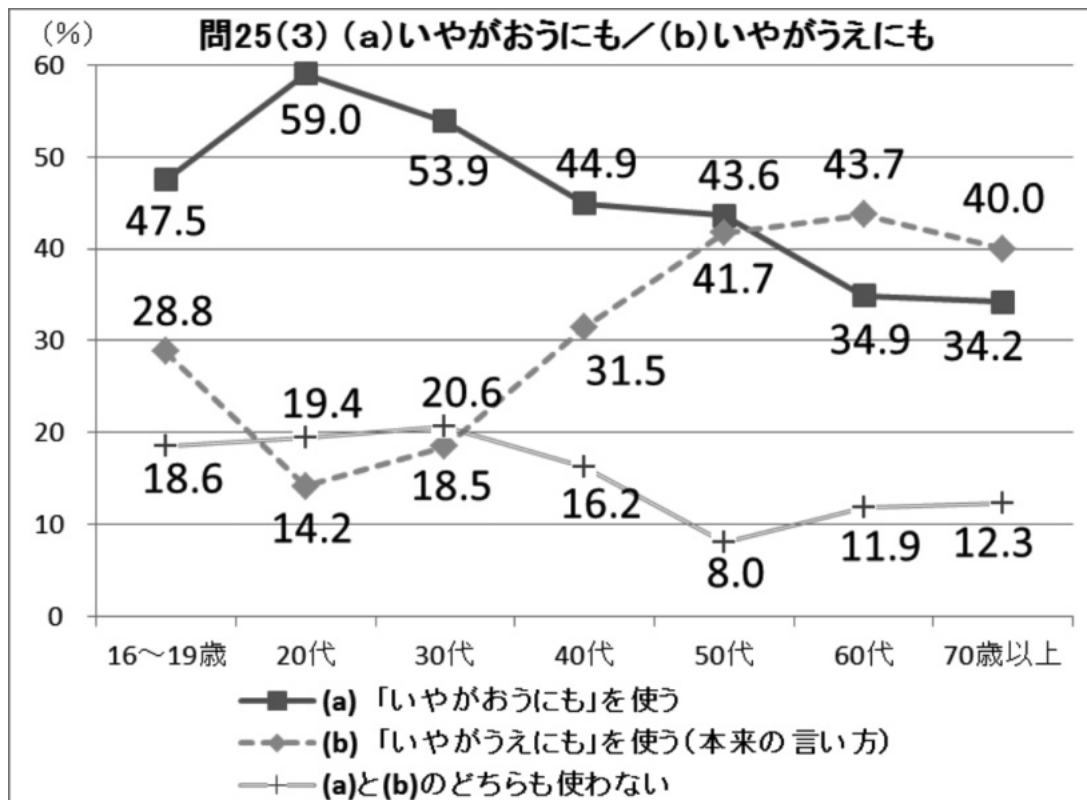
若い世代ほど、この表現を無頓着に使っているように見える。また過去の調査結果(平成18年度)と比較すると、「熱にうかされる」の割合が、全ての年代で前回よりも高くなっている。特に60代で31ポイント、50代で30ポイント、それぞれ高くなっている。全国的には、今は本来の「熱にうかされる」という言い方が定着しているといえるが、このまま推移すれば、今後は「熱にうなされる」の方が多く使われるようになっていく可能性もあるといえそうだ。

### 3) 「いよいよ、ますます」を伝えるときに使う表現は？

① 「いやがおうにも」	27	(26.2%)
② 「いやがうえにも」	6	( 5.8%)
③ ①②の両方とも使う	1	( 1.0%)
④ ①②のどちらも使わない	32	(31.1%)
⑤ 分からない	36	(35.0%)
無回答	1	( 1.0%)

＝跡見女子大学生は、「いよいよ、ますます」を伝えるときに使う表現は、あえて使う場合には「いやがおうにも」だが、ほとんどの場合は「分からない」か「使わない」＝  
 跡見女子大学生の多くは、この質問での「いよいよ、ますます」を伝える表現について、「分からない」または「いやがおうにも」「いやがうえにも」のどちらの表現も使わない、と回答した人が最も多かった。両者をあわせると66.1%と6割をこえる。あえて使うとすれば「いやがおう





〔問25〕慣用表現について(3)「いやがおうにも／いやがうえにも」(文化庁「国語調査」より)

にも」という学生が26.2%いる。辞書などで本来の慣用表現とされるのは「いやがうえにも」であるから、この表現を使っている学生は本来の言い方を知らずにか無意識にか、誤って使っている可能性がある。文化庁の全国国語調査でも、「いやがおうにも」が42.2%、「いやがうえにも」が34.9%で、本来の表現の「いやがうえにも」を使う人が7.3ポイント少なかった。跡見女子大学生に限らず、全国的にこの表現が誤って定着している実態が見えてくる。

次の〔問25〕慣用表現について(3)は、「いやがおうにも／いやがうえにも」の全国での使われ方をグラフ化したものだが、これを年齢別に見ると、本来の言い方とされる「いやがうえにも」の割合は50代以上で他の年代より高く、4割台前半となっている。一方、「いやがおうにも」の割合は20～30代で他の年代より高く5割台となっている。若い世代と高齢世代で結果が逆転している。また「どちらも使わない」人の割合は、30代以下で他の年代より高く、2割前後となっている。この表現も、若い世代では使われなくなってきていると思われる。

4) 「心配や不安を感じ、表情に出すこと」を伝えるときに使う表現は？

①「眉をひそめる」	51	(49.5%)
②「眉をしかめる」	20	(19.4%)
③ ①②の両方とも使う	10	(9.7%)
④ ①②のどちらも使わない	13	(12.6%)
⑤ 分からない	8	(7.8%)

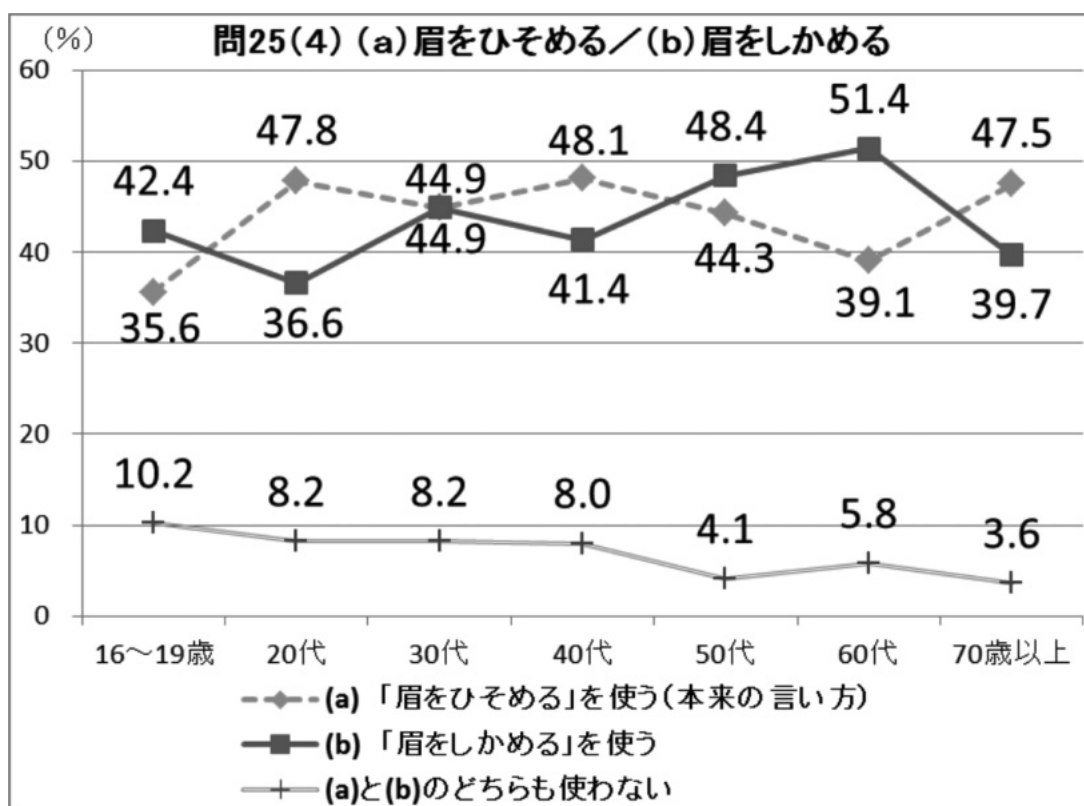
無回答

1 (1.0%)

＝跡見女子大学生は、「心配や不安を感じ、表情にだすこと」を伝えるときに使う表現は、「眉をひそめる」で、半数近くの学生が使っている＝

跡見女子大学生が「心配や不安を感じ、表情に出すこと」を伝える表現は「眉をひそめる」で、49.5%と半数近くの学生が使っている。辞書などで本来の慣用表現とされるのは「眉をひそめる」であるから、跡見女子大学生の多くは本来の言い方を使っていることになる。文化庁の全国国語調査では、「眉をひそめる」が44.5%、「いやがうえにも」も44.5%で、どちらもほぼ半数ずつの人が使っている結果が出ている。跡見女子大学生は全国に比べて5ポイント多い学生が本来の慣用表現を使っている。

〔問26〕慣用表現について（3）は、「眉をひそめる／眉をしかめる」の使われ方をグラフ化したものだが、これを年齢別に見ると、本来の言い方とされる「眉をひそめる」の割合は20代、40代、70歳以上で4割台後半となっているのに対し、16～19歳と60代で3割台後半となっている。一方、「眉をしかめる」の割合は50～60代で他の年代より高く5割前後となっている。これを見ると、「眉をひそめる」と「眉をしかめる」が年代によって上下しており、割合も拮抗している。全国的には両者が混在して使われているというのが実態ではないだろうか。広辞苑（第6版）によれば、「眉を顰（ひそ）める」の意味は「心中に憂い危ぶむことがあって顔をしかめる、または、他人の忌わしい行為に対して不快に思い、顔をしかめる」ということである。「ひそめる」は、「不快な気持ちで眉の辺りに皺をよせる」状態であり、「しかめる」は「不快・苦痛など



〔問26〕慣用表現について（4）は、「眉をひそめる／眉をしかめる」（前掲「国語調査」）

のために、額・顔の皮をちぢめて皺をよせる」意味で、皺を寄せる部位が似ていることなどから、混在して使われてきているのではないかと推察できる。

### 【全体分析】

今回の文化庁の全国調査では、尋ねた4つの慣用表現のうち、本来の言い方ではない「いやがおうにも」が、本来の言い方とされる「いやがうえにも」より多く選択されるという結果となった。また、本来の言い方とされる「眉をひそめる」と本来の言い方ではない「眉をしかめる」は同じ割合で使われている。跡見女子大学生のアンケートに戻れば、慣用表現への関心の薄さも垣間見える。本来は「熱にうかされる」と言うべき表現を「熱にうなされる」と言ったり、「いやがうえにも」を「いやがおうにも」と言ったりしているが、「眉をひそめる」では、正しい表現を使っていることも分かった。跡見女子大学生にとっては、こうした慣用表現自体が生活の中で縁遠い存在になって来ていることを窺わせる調査結果であった。

## 5. まとめ

今回の平成27年度跡見女子大学生の「国語・コミュニケーションに関するアンケート調査」では、跡見女子大学生の「国語」や「コミュニケーション」に関する意識や考え方が様々な点で明らかになった。以下にまとめて、結びとしたい。

### I) 「国語の乱れ」に関する跡見女子大生の意識

今の国語は乱れていると思うかそれとも乱れていないと思うかを尋ねた結果、跡見女子大学の学生は「乱れていると思う」の割合が62.1%、逆に「乱れていないと思う」の割合は16.5%であった。全国平均では「乱れていると思う」人は73.2%であり、跡見女子大学生は全国平均より10ポイント以上もその割合が低い。同時に「乱れていない」と答えた学生の割合（16.5%）も全国平均（23.5%）を下回った。一方で「分からない」と回答を留保した学生（21.4%）が全国平均（3.3%）よりも18ポイント以上も多い。これは“国語の乱れ”の定義づけや判断基準が明確になっていないことによる“迷い”とも考えられる。

次に、跡見女子大学生の特徴は、家庭での言葉遣いに関する“しつけ”を厳しく受けてきた学生が多いと思われる。アンケートでは、小さい時から小学生ぐらいまでの間に家庭で言葉遣いについて注意されたか、注意されなかったかを尋ねた。跡見女子大学生のうち「注意された」学生の割合（81.6%）は、「注意されなかった」学生の割合（15.5%）よりも61.1ポイントも高い。文化庁の全国国語調査の結果と比較してみると、跡見女子大学生が「注意された」割合は全国調査の56.1%を25.5ポイントも上回っている。跡見女子大学生の家庭では、言葉遣いについての“しつけ”が、全国調査と比べて厳しく行われているということが窺える。さらに家庭で誰に注意されたかについては、「母親」が73.8%で最も高く、次いで「父親」（36.9%）、「その他の人（おじ／友人／アルバイト先の上司／兄弟姉妹／先生）」の順であった。そして跡見女子大学生は、言葉遣いで最も強い影響を受けた人やものについて、1) 母親（44.7%）2) テレビ・ラジオ（43.7%）3) 友達（42.7%）をあげた。文化庁の全国調査では「テレビ」が81.4%で最も高く、次いで「母親」（72.3%）となっている。跡見女子大学生はテレビ・ラジオよりも母親の影響度が大きいことが分かる。3位と4位も跡見と全国調査では結果が逆で、跡見女子大学生は父親（26.2%）よりも友達（42.7%）の方が影響度が大きく、父親の存在がやや希薄であるのが特徴となっている。

### II) 若者に多いとされる表現の使用頻度について

今回の跡見女子大学生の「国語・コミュニケーションに関するアンケート調査」では、日常生

活の会話の中で聞かれる言い方から、「わたし的には」「話とかしていました」「良かったかな、みたいな…」「やばい」「微妙」「うざい」の6つの例を挙げて、それぞれの言い方をすることがあるか、それともないかを調べた。それぞれの例について「よく言う」の割合を見ると、(5)「微妙」が69.9%、(4)「やばい」が68.0%と6割台後半となっている。跡見女子大学生の調査結果では「微妙」と「やばい」という言い方は「よく言う」人と「ときどき言う」人を合わせると、共に9割以上になり、若い世代でよく使うこの2つの表現は、跡見女子大学生も使う人が圧倒的に多い。その点では、全国的な若者層の言葉遣いの傾向と違いは見られない。これに続く使用頻度の多い表現は「うざい」で、「よく言う」人と「ときどき言う」人を合わせると7割近くになる。しかし、「よく言う」人のみだと36%ほどで、語感の強さからか、使わない学生も多いという結果が出ている。

### Ⅲ) 漢字を用いた語と外来語の使用頻度について

跡見女子大学生が「カタカナ語」よりも「漢字を用いた語を使う」という言葉は、調査項目の中では、「必要性」「合意」「優先順位」「基本計画」「技術革新」「災害予想地図」の6項目で、最も高いのは「優先順位」(87.4%)、次いで「基本計画」(78.6%)、「合意」(74.8%)であった。一方「カタカナ語を使う」という言葉は「キャンセル」「メリット」「リスク」「スキル」の4語で、5割以上の支持を得た言葉は、高い順に「メリット」(67.0%)と「キャンセル」(65.0%)の2語であった。跡見女子大学生の場合は、格好の良さから「カタカナ語」をよく使うというような傾向は見られず、多くの項目で、「漢字を用いた語」を使う傾向が強く読み取れる。

文化庁の全国国語調査の結果でも「漢字を用いた語を使う」という言葉は「優先順位」が89.6%で最も高く、ほかの全ての項目においても「漢字を使う」という回答が5割を超えている。一方全国調査で「カタカナ語を使う」という割合が最も高い言葉は「ハザードマップ」(25.3%)で、次いで「メリット」(19.2%)となっている。「カタカナ語」の使用については、跡見女子大学生も全国的にも慎重な傾向が表われ、どちらかといえば、漢語表現の方を使う傾向が強いことが読み取れる。

### Ⅳ) 新しい複合語、省略語について

最近よく使われるとされる新しい複合語、省略語のうち、跡見女子大学生が自分で最もよく使う語は「女子力」(64.1%)、次いで「就活」(62.1%)、「大人買い」(61.2%)、「デパ地下」(57.3%)で、「婚活」や「イクメン」はあまり使われていない現状が浮かび上がった。本学学生の場合は、自分たちの生活に深く関わっている言葉をネットなどで見つけ出して集中的に使う傾向が普段から見られるため、性別や年齢、生活スタイルの面で縁遠い言葉には飛びつかないかむしろ拒否的な反応さえ見せているのではないだろうか。今回の調査語については、文化庁の全国調査で使われた語に準じたが、調査結果に大きなバラつきが見られたことをみると、今後こうした調査を行う際には、調査語の選び方についても学生間で関心のある言葉を含めるなど、充分留意する必要があることを示唆してもいい。

### Ⅴ) 慣用句の意味・言い方について

今回の文化庁の国語調査では、尋ねた慣用句のうち、2)「枯れ木も山のにぎわい」は、本来とは違う意味とされる方が多く選択されるという結果となった。過去の調査結果(平成16年度)と比較すると、2)「枯れ木も山のにぎわい」では、本来の意味ではない方を選択した割合が12ポイント増加している。また、今回の跡見女子大学生の調査と全国調査の結果を比較すると、跡見女子大学生は「おもむろに」と「小春日和」を本来の意味とは異なる意味で使い、「枯れ木も山のにぎわい」と「天に唾(つば)する」という慣用句では、「分からない」という理由で、そ

の使い方や意味を選択しなかった。この結果から、跡見女子大学生は、日本語としての重要な教えを伝えられてきた慣用句には、普段の生活の中であまり接触していないか、慣用句からは縁遠い毎日を送っていることが想像できる。この点において本学学生は、ぜひ重要な慣用句や国語の常識的知識を身に付ける必要があると筆者は考える。

#### Ⅵ) 慣用表現について

今回の文化庁の全国調査では、尋ねた4つの慣用表現のうち、本来の言い方ではない「いやがおうにも」が、本来の言い方とされる「いやがうえにも」より多く選択されるという結果となった。また、本来の言い方とされる「眉をひそめる」と本来の言い方ではない「眉をしかめる」は同じ割合で使われている。跡見女子大学生のアンケートに戻れば、慣用表現への関心の薄さも垣間見え、本来は「熱にうかされる」と言うべき表現を「熱にうなされる」と言ったり、「いやがうえにも」を「いやがおうにも」と言ったりしており、マスコミなどの影響もあると思われる。一方、「眉をひそめる」では、正しい表現を使っていることも分かった。跡見女子大学生にとっては、慣用表現自体が生活の中で縁遠い存在になってきていることを窺わせる調査結果であった。

最後に、今回筆者が行った跡見女子大学生を対象としたアンケートによる調査の分析考察については、対象となる母数の小ささや調査方法の問題、統計的処理を厳密に行っていないことなどの諸点から、本稿は極めて限定的な解釈と分析・考察になっていることをお断りしておく。

#### (引用グラフ・表)

文化庁『平成26年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』より

- 問1 国語が乱れていると思うか
- 問2 家庭で言葉のしつけ
- 問3 家庭で受けた言葉のしつけについて
- 問4 中学生・高校生の言葉遣いの乱れについて
- 問5 子供の言葉遣いに注意を与えるべき人
- 問6 子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やもの
- 問22 (1) 「わたし的には」
- 問22 (2) 「話とかしていました」
- 問22 (3) 「良かったかな、みたいな…」
- 問22 (4) 「やばい」
- 問22 (5) 「微妙」
- 問22 (6) 「うざい」
- 問24 (1) おもむろに
- 問24 (2) 枯れ木も山のにぎわい
- 問24 (3) 小春日和
- 問24 (4) 天に唾する
- 問25 (1) (a) 青田買い / (b) 青田刈り
- 問25 (2) (a) 熱にうなされる / (b) 熱にうかされる
- 問25 (3) (a) いやがおうにも / (b) いやがうえにも
- 問25 (4) (a) 眉をひそめる / (b) 眉をしかめる



# (参考文献)

- ・文化庁『平成26年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁 HP）2016年1月10日閲覧
- ・桑本裕二（著）『若者ことば不思議のヒミツ』秋田魁新報社（2010／7／6）
- ・米川明彦（著）『若者語を科学する』明治書院（1998／3）
- ・原沢伊都夫（著）『日本人のための日本語文法入門』（講談社現代新書）2012／9／14
- ・金田一春彦『金田一春彦著作集第二巻』玉川大学出版部、2004年
- ・井上史雄『敬語はこわくない 最新用例と基礎知識』講談社現代親書、1999年
- ・文化審議会答申「敬語の指針」2016年1月10日閲覧
- ・文化庁『言葉のしつけ』（ことばシリーズ2）単行本
- ・井上史雄『日本語ウォッチング』岩波親書、1998年
- ・金水 敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、2003年
- ・国立国語研究所「外来語」委員会編『わかりやすく伝える外来語の言い換え手引き』ぎょうせい、2006年  
ISBN-4-324-07958-7
- ・高木一彦「慣用語研究のために」（『教育国語』）1874年
- ・松木泰丈編『日本語研究の方法』むぎ書房、1978年